

王鐸題跋訳注（一）

高津 孝・大野 紘暉

1 題孫謀書華嚴經

余至秣陵、求善書者、波斯采寶、辛苦頭白。丁丑二月初一日、夜雪積七寸、孫子持全卷華嚴經。日出寒光滿山、如百千朗日懸于虛空、此經大通圓

滿、以開衆生迷晦、而佛日炳煜、即此大光明耳。

本訳註は、王鐸『擬山園選集』（文集 卷三十八「題跋二」四十三條）うち十三條は既訳）に対する訳註である。テキストは中国国家図書館所蔵『擬

五城孫子稱善知識者也、能如子昂書法華了願、為釋門左右史、其願力不

山園選集』（清順治十年王鑪刻本）に従い、『擬山園選集・文集』（崔利民主

既多乎。昔有用殷學士法寫經、四風雨畢劫、不被方丈之地、大法之護持神

編、李根柱占校、河南人民出版社、二〇二三年）を参考とした。王鐸『擬

矣。

山園選集』には特殊な異体字が使用されている場合があるが、本訳註では、

夫華嚴之開迷蒙也、筆墨皆奇焉者也。不見華嚴者見點畫、見不真華嚴者

正字が判明するものはそれに従った。また、本訳註は個人のパソコンで原

見恍惚。得見華嚴者、無護亦無持、無明亦無晦、無余亦無孫子、無衆生亦

稿を作成しweb公開するため、旧字体使用に限界があることはご了承願

無虚空、無圓滿亦無華嚴。如是以觀孫子之書華嚴、余復何所觀耶。其頂禮

いたい。また、既に前作「王鐸書論訳注（二）」『鹿大史学』七一、二〇二

而問之。

四年）に既出のもの十三條は注記して省略した。

孫謀の書せる華嚴經に題す

余は秣陵に至り、書を善くする者を求むるに、波斯の寶を采り、辛苦して頭白なり。丁丑二月初一日、夜雪積むこと七寸、孫子は全卷華嚴經を持す。日出でて寒光 山に滿つること、百千の朗日の虚空に懸かるが如し、此の經は大通圓滿にして、以て衆生の迷晦を開き、而して佛日炳煜なるは、即ち此の大光明なる耳。

五城孫子は善知識なる者也と稱せられ、能く子昂の『法華』を書して願するが如く、釋門の左右史為りて、其の願力は既に多からざらん乎。昔殷學士の法を用ゐて寫經すること有り、四たび風雨の畢く劫かすも、方丈の地は被らず、大法の護持神なり矣。

夫れ華嚴の迷蒙を開く也、筆墨は其れ焉（これ）に寄する者也。華嚴を見ざる者は點畫を見、真ならざる華嚴を見る者は見ること恍惚たり。華嚴を見ることを得る者は、護すること無く亦た持すること無く、明無く亦た晦無く、余無く亦た孫子無く、衆生無く亦た虚空無く、圓滿無く亦た華嚴無し。是くの如く以て孫子の書ける華嚴を觀るは、余は復た何の觀る所耶。

其れ頂禮して之を問はん。

私は秣陵に赴き、書に長けた人を探したが、それはベルシャの商人が奇寶を採取するかのように困難を極め頭髮が真っ白になるようなものである。崇禎十年（一六三七）二月一日、夜に雪が降って七寸ほど積もった中、孫謀どのが『華嚴經』全卷を持参した。太陽が昇り寒々とした光が山に満ちる様子は、数多の明るい太陽が天空に懸かるかのようである。この『華嚴經』は真理に到達し完璧であり、衆生の迷妄を打破するもので、仏の知恵のきらめきは、即ちこの大いなる光明である。

孫謀は善知識（正法を説いて人を仏道に導き精進させる人）と称され、趙孟頫が『大乘妙法蓮華經』を書いて願いが叶ったことにお礼をしたように、仏門の書記官たることを能くし、その衆生を救おうとする菩薩の誓願の力はなんとすごいことか。かつて、ある僧侶が東晋の殷浩のように空中に字を書くやり方で蓮華經を写経したが、四度風雨に脅かされても、その居室は被害を受けなかった。この経典は仏法の護法神である。

そもそも『華嚴經』が衆生の迷妄を打破するとき、筆墨がそれに寄与している。『華嚴經』の真実を見ないものは文字の点画だけを見ており、真ならざる『華嚴經』を見るものは、ぼんやりと見ているだけである。真なる『華嚴經』を見ることができたものは、護ることなく持することもなく、明もなく晦もなく、私も無くまた孫謀も無く、衆生もなくまた虚空も無く、完璧さも無くまた『華嚴經』もない。このように、孫謀が書いた『華嚴經』を見ることをもって、私はまた一体そこに何を見ているのであろうか。孫謀どのに礼拝して質問しよう。

注

題孫謀書華嚴經 孫謀 字は燕貽、別の字は五城。書や詩文をよくした。

〔乾隆〕上元縣志〕卷末「據佚」に記載がある。本跋文は、崇禎十年（一六三七）二月一日に書かれた。

秣陵 秣陵県、秦の始皇三十七年に設置、会稽郡に属す。隋の開皇九年に秣陵縣は江寧県に併入した。

波斯採寶 石田幹之助『増訂長安の春』（平凡社、一九六七）に、「西域の商胡、重価を以て宝物を求める話」「再び胡人採宝譚に就いて」「胡人買宝譚補遺」の三編がある。石田によれば、唐または五代の小説や隨筆にしばしば見られる形式に、或る人が何かの機会に或る宝物を手に入れる。この宝物は多くの場合つまらぬものと思われ、当人はこれを宝物と知らない。それをまた或る機会に支那に來ている西域の商人に見せると、非常に珍重して莫大な価でこれを買って行くというものがあるという。

辛苦 困窮 困難 『左傳』襄公九年：「其民人不獲享其土利、夫婦辛苦墊隘、無所底告。」

華嚴經 大乘仏教を代表する經典の一つ。漢訳では大方広仏華嚴經と称し、略した名稱が華嚴教である。華嚴經とは、広大な真実の世界を包含する仏が、一切の衆生、万物らとともにあり、一切の衆生、万物も仏を共有できることを、華の美しさにたとえて説いた經典のこと。東晉・仏駄跋陀羅訳の六〇卷本、唐・実叉難陀訳の八〇卷本、唐・般若訳の四〇卷本の三種がある。

百千 数多。唐白居易「泛春池」詩：「霜竹百千竿、煙波六七畝。」

朗日 明るい陽光。晉陸機「瓜賦」：「若乃紛敷雜錯、郁悅婆娑、發彼適

此、迭相經過、熙朗日以燿燿、扇和風其如波、有葛藟之簞及、相椒聊之衆多。」

圓滿 仏教語、仏事が完全に行われる。隋煬帝「與釋智顛書」：「功德圓滿、便致荊巫。」

迷晦 茫漠としていて暗い。明蔣一葵『長安客話』雅思山：「園之南有雅思山、迷晦多霧、富有果廬。」

佛日 仏の光明が衆生の無知の闇を照らすことを太陽に比喻した語。『觀無量壽經』：「唯願佛日教我、觀於清淨業處。」

炳煜 光輝く。『宋史』樂志十：「天回袞彩、風韶瑣玉。咸英曠亮、容典炳煜。」

善知識 仏語。善法、正法を説いて人を仏道に入らせる人のこと。外護、同行、教導の三つを教える。

子昂 趙孟頫、元代の書画家。呉興の人。字は子昂。号は松雪道人。宋の皇族出身だが、元朝に出仕する。書は王羲之、画は唐・北宋画を師とし、書画ともに元朝第一と称された。

子昂書法華 延祐二年（一三二五）、趙孟頫六十二歳の小楷作品に「大乘妙法蓮華經 卷五」（首都博物館蔵）がある。

了願 為釋門左右史 典故は、王世貞『弇州四部稿』（四庫全書）卷一三一「趙吳興小楷法華經」：「法華經兼明二宗、又似釋門左右史、蓋釋迦、阿彌陀佛及妙音、觀世音、普賢、藥王、文殊、彌勒諸菩薩緣起、功德皆在焉。然其大指、多寓言以攝化耳。……書法華者人以十數、獨趙吳興為勝。而此卷乃吳興自了願者、以小楷書精繭、其結構細密、肉骨豐適、蓋備有北海、誠懸之妙、而時濟以大令者也。」

了願 神仏にかけた願が成就したことに對しお礼をすること。元・高文秀

「黒旋風」第一折：「孫孔目哥哥到那山上要點燭燒香、回錢了願、都是你與他當值來。」

左右史 周代の左史、右史のこと。ともに天子の側に侍して、その言行を記録した。『禮記』玉藻：「一日左史記言、右史記事。」

殷學士 殷浩。東晋の政治家・軍人。字は深源。本貫は陳郡長平県。父は豫章郡太守殷琰。従子は東晋の武將殷仲堪（叔父の殷融の孫）。叔父の殷融と共に『老子』や『易経』をよく好む。はじめ、三府（太尉・司徒・司空）から招聘を受けるが、いずれも辞退。咸和九年（三三四）六月、征西將軍庾亮から招かれ記室參軍となり、累進して司徒左長史に任じられた。後の十年近くに渡り隱居を続け、永和二年（三四六）二月、衛將軍褚裒は司馬昱へ殷浩を推挙して登用を勧め、司馬昱も同意。三月、殷浩は招聘を受け建武將軍・揚州刺史に任じられた。

大法之護持神矣 『倉州四部稿』（四庫全書）卷百三十一「趙吳興心經真蹟」：

「般若密多心經、是王舍城中無上三昧誦、吳興書、是蘭亭室中無上三昧筆。

昔有開士學殷揚州咄咄法寫蓮華經、能使方丈地畢劫不被四風雨。今留此經山房中、鄴侯三萬卷皆賴護持矣。珍重珍重。」殷揚州は、殷浩を指す。開士は、菩薩の別称、また、僧侶を指す。南北朝・宋・劉義慶『世說新語』黜免に「殷中軍（殷浩）被廢在信安、終日悔書空作字、揚州吏民尋義逐之、竊視、唯作「咄咄怪事」四字而已。」とあり、韓愈「送諸葛覺往隨州讀書」詩に「鄴侯家多書、插架三萬軸。」とある。鄴侯は唐・李泌を指す。

御筆十字煌煌、重典楷則自範、所謂仁義起麒麟、威形發龍虎者、非耶。

拜稽審觀、儼然有振綱植紀、中天立極之氣、為文士之例雍懸針、不足言矣。

臣某跋。

内府帖 旨を奉じての跋

御筆十字は煌煌たりて、重典楷則にして自ら範たりて、所謂「仁義は麒麟に起り、威形は龍虎に發す」者にして、非ならん耶。拜稽審觀するに、儼然として振綱植紀、中天立極の氣有りて、文士の例雍懸針為ること、言ふに足らず矣。臣某跋す

天子直筆の十字は光り輝き、厳格な法式で自然と規範たるものであり、まさしく庾肩吾『書品』に言う「仁義は麒麟書に起り、威嚴あるさまは龍虎象に発する」もので、そうではないと言えようか。叩頭して仔細に観るに、あたかも綱紀を打ち立て、天空に最高の規範を樹立する氣迫があり、文人の例雍書、懸針書のような文字とするなど、言うに足りないものである。臣下である何某跋す。

注

内府帖卷五跋 内府帖が何を指すかは不明。

煌煌 光り輝く様。『詩経』陳風 東門之楊…昏以為期 明星煌煌。」朱熹の集傳に「煌煌、大明貌。」とある。

重典 厳格な法。『周禮』秋官大司寇…「刑亂國用重典。」鄭玄の注に…「用重典者、以其化惡伐滅之。」

楷則 法式。『孔叢子』連叢子下…「季彥為人謙退愛厚…下筆則典故成章吐言必正名務理、故每所交遊、莫不推先以為楷則也。」

仁義起麒麟、威形發龍虎者 梁・庾肩吾・書品に「仁義起於麒麟、威形發於龍虎。」とある。ここでの麒麟は麒麟書のことを指す。麒麟は仁獸と言われ、『春秋公羊伝』哀公十四年に「麟者、仁獸也。有王者則至。」とある。また、

ここでの龍虎は、龍虎書を指す。

拜稽 叩頭。『儀禮』覲禮…「王受之玉。侯氏降階、東北面再拜稽首。」

審觀 仔細に観察する。宋・周輝『清波別志』卷下…「陛下審觀、今日謀議之臣、孰如趙普、將帥之良、孰如彬美。」

儼然 儼然。『論語』堯曰…「君子正其衣冠、尊其瞻視、儼然人望而畏之。」

振綱植紀 綱紀は、物事の根本となる要綱。『荀子』勸學…「禮者、法之大分、類之綱紀也。」

中天 天空。『列子』周穆王…「王執化人之祛、騰而上者、中天迺止。」

立極 最高の規範を樹立する。唐 杜甫「有事於南郊賦…」所以報本反始所以慶長立極。」

文士 詩文書画に従事する人。文人。南朝・梁・劉勰『文心雕龍』詔策…「隴石多文士、光武加意於畫辭。」

例薙懸針 例薙は、例薙書のこと。懸針は、懸針篆のこと。唐・徐堅『初

學記』卷二十一「文字第三事對」に「蕭子良古今篆隸文體、有臺書、楷書、蓬書、懸針書、飛日書、填書、奠書、鳥書、虎爪書、偃波書、仙人書、芝英書、十二時書、例薙書、龜書、麒麟書、金錯書、蚊腳書、凡數十種、皆出於六義八體之書、而因事生變者也。」

3 跋聖教序帖 「王鐸書論詠注（二）」第二章七

4 跋絳帖 「王鐸書論詠注（二）」第二章十一

5 題黎兵部留犢圖

觀瑤石留犢圖、古人一事便足傳續、可見雲花艸蟲、空潭月光、無益於心骨也。

然君子持其大、有益於社稷蒼生、大法大功、大信大廉、碎匄超邁、豈爭于一犢之留不留哉、故畫雲花潭月、不如畫古聖士賢、摩厲振奮、其益多矣、三四睇思之留犢事、其小之乎畫也歟。

黎兵部の留犢圖に題す

瑤石の留犢圖を觀るに、古人の一事は使ち傳繪するに足り、雲花艸蟲、

空潭の月光は、心骨に無益ならんを見るべし也。

然るに君子は其の大いに社稷蒼生に有益なるを持し、大法大功、大信大

廉にして、碎匄超邁し、豈に一犢の留不留を争はん哉。故に雲花潭月を畫

くは、古聖古賢を畫きて、摩厲振奮して、其の益多きに如かず矣。三四蹄

思の留犢の事は、其の之を畫に小とせん也歟。

黎民表の「留犢圖」を拜見したが、時苗の故事は後世に伝え絵に描かれるに足る事柄である。(画題としてよく描かれる)ちぎれ雲、草木間の昆虫、澄んだ深淵に映る月光は、精神に裨益しないことが分かる。

しかしながら、君子はその大いに国家や民に有益であることを目的としてかかげ、法を重視して大きな功績をあげ、信頼を獲得して清廉潔白であり、雷鳴が轟くように古今を超越するものであり、離任に当たって子牛を留めるか否かを争わないものである。それ故に、ちぎれ雲や淵に映る月を描くことは、古代の聖人や賢者を描き、修練奮起して、裨益するものが多いことに及ばない。子牛を何度も横目で見ながらも子牛を残して置いていた人物のことを黎民表どのは絵画にすることで、それをつまらぬことと

したのであろうか。

注

題黎兵部留犢圖 黎兵部は、黎民表のこと。字は惟敬、號は瑤石、羅浮山

樵、瑤石山人。廣東從化韶峒の人。嘉靖十三年(一五三四)の挙人。嘉靖四十四年(一五六五)、南兵部員外郎となる。書は文徵明から学んだ。『古今圖書集成』理學匯編・文學典・卷二百二「黄佐(欧大任 黎民表)」に「徵明嘗語人曰、隸書嗣吾後者、惟敬也。」と記載されている。

留犢 時苗は地方官在任中に生まれた子牛すら、離任に当たって持ち去ら

なかった。清廉潔白な地方官吏のたとえ。『三國志』魏志常林傳にある裴松之の注に、「時苗、字德賢。……建安中、入丞相府。出為壽春令。……店官歲余、牛生一犢、及其去、留其犢、謂主簿曰、令來時本無此犢、犢是淮南所生有也。」とある。

雲花 ちぎれ雲。南朝・齊・王融「永明樂」詩之六「香風流梵瑱、澤雨散雲花。」

艸蟲 草木間の昆虫。『詩經』召南 草蟲「嘒嘒草蟲、趨趨阜螽。」

空潭 清く澄んだ深淵。唐 王維「過香積寺」詩「薄暮空潭曲、安禪制毒龍。」

月光 『擬山園選集』では「目光」と記されている。月光の誤りか。

心骨 心。唐 元稹「連昌宮詞」「我聞此語心骨悲、太平誰致亂有誰」

社稷 国家。『禮記』檀弓下「能執干戈以衛社稷。」

蒼生 庶民。一般大衆。『文選』史岑「出師頌」「蒼生更始、朔風變律。」

劉良の注に「蒼生、百姓也。」とある。

大功 大きな功績。『書』大誥「敷前人受命、茲不忘大功。」

「超越。『梁書』武帝紀下：「文質彬彬、超過今古。」

碎旬 宋・胡寅・人日驚蟄前數日大雷奇孫奇父韓叔夏「栗烈鼓噫氣、碎旬動霆聲。」

「摩厲 練磨。『國語』越語上：「其達士、絜其居、美其服、飽其食、而摩厲之於義。」

振奮 奮起。晉郭璞〈山海經〉圖贊中山經：「有獸虎爪、厥號曰獬。好自跳撲、鼓甲振奮。」

也歟 也與。語氣助詞。疑問を表す。『論語』雍也：「仲由可使從政也與。」

6 跋換竹帖

王逸少換鵝事、人知之。傅給事以鵝竹帖子、亦山陰韻事、而事竟不傳、

胡為耶然。

傅給事當南渡時、梗於秦檜、大節忠勤、一世儔輩、如聽雷轟。但困於成

貝、不竟厥用、是可恨耳。

信乎人之所見於世、既已偉也、其小事之略也。復奚所恨。

換竹帖に跋す

王逸少換鵝の事は、人之を知る。傅給事の鵝を以て竹とするの帖子も、

亦た山陰の韻事にして、而るに事は竟に傳はらざるは、胡為（なんすれ）

ぞ耶然るや。

傅給事は南渡の時に當りて、秦檜を梗（ふさ）ぎ、大節忠勤、一世儔（お

そ）れ輩（おそ）るること、雷轟を聴くが如し。但し成貝に困じ、厥（そ

の用を竟げざるは、是れ恨む可き耳。

信なる乎（かな）人の世に見（あらは）るる所は、既に已に偉なれば、

其の小事は之れ略さるる也。復た奚（なん）の恨む所ぞ。

王羲之が自ら書写した道德経と鵝鳥を交換したことは、人々の知るところである。傅給事が鵝鳥を竹に交換したことを記した詩稿も、同様に山陰

における風雅な事であるが、事が意外にも伝わっていないのは、どうしてであろうか。

傅給事は宋王朝が南遷し、南宋となった時、秦檜を阻害し、大節にして忠義を尽くし、世の中全体を震え上がらせたが、それは雷鳴を聞くかのようであった。しかし、小人に陥れられ、その役割を果たせなかったのは、恨むべきことである。

本当であるなあ、ある人物の世間で評価される点が偉業であれば、小事は省略されるということは。(傅松卿の換竹の故事が世に知られていないことは) 何の恨むことがあるうか。

注

跋換竹帖 本跋文は、南宋・陸游『渭南文集』卷三十一「跋傅給事竹友詩稿」を踏まえた内容である。その全文は、「王逸少寫經換鵝 給事傅公籠鵝換竹、二者皆山陰勝絶事。然換鵝事、人皆能道之。換竹事、未甚著、鄉人以爲恨。獨某曰。是不足怪也。逸少志在物外、不肯輕爲世用、故換鵝事易傳。給事方南渡之初、忠義大節、爲一時稱首、雖困於讒誣、用之不盡、然至今聞其風者、可立衰懦。則換竹事、固應不傳、蓋所見於世者大也。給事遺文白卷、今藏秘閣、某願策府時見之。嘉定元年七月庚申、陸某謹識。」である。

王逸少換鵝事 これは、『晋書』卷八十一「王羲之」に記載される「又山陰有一道士、養好鵝、羲之往觀焉、意甚悅、固求市之。道士云、爲寫道德經、當舉群相贈耳。羲之欣然寫畢、籠鵝而歸、甚以爲樂。其任率如此」を踏まえた内容である。

傅給事以鵝換竹帖子 傅給事は、南宋の傅松卿のこと。傅松卿、字は子駿、山陰の人。政和五年、甲科に拔擢される。考功員外郎を授かり、太子舍人も兼ねた。

韻事 風雅なこと。

大節 困難に立ち向かう節操。唐・吳兢『貞觀政要』中義、「姚思廉不懼兵刃、以明大節、求諸古人、亦何以加也。」

忠勤 忠義を尽くして勤める。『後漢書』公孫瓚傳、「長沙太守孫堅、前領

豫州刺史、遂能驅走董卓、掃除陵廟、忠勤王室、其功莫大。」
一世 当代。『左傳』昭公元年、「二世無道、國未艾也。」

儻 屈服させる。震え上がらせる。

雷霹 雷。南宋『五灯会元』、「佛塔被雷霹。」

成員 「詩經」小雅・巷伯「萋兮斐兮、成是貝錦(入り混じり、美しいなあ、貝の模様の錦織を作り上げる。)」また、『毛詩注疏』に「箋云、…興者、喻讒人集作已過、以成於罪、猶女工之集采色、以成錦文。」とある。誹謗の言葉が、貝殻模様の錦織を織り上げるようであることに喩える。

7 跋杜詩虞趙註

註杜者不下數十家、半有牽合、學者讀書著作、解悟少陵、地位必相去已近、則真氣通真氣、不通不如無附會也。譬如觀書法、必知羲獻顯處藏處、觀至無聲色處、然後下筆、自爾不伍唐宋。吾觀於註杜、不能不嘆於十三經之註、失其半也。

嗚呼、世之揣摩古今人物忠佞賢否、輕爲之評。天地間寧止十三經半乎。

杜詩虞趙註に跋す

杜に註する者は數十家を下らざるに、半ばは牽合有りて、學者は讀書著作し、少陵を解悟するに、地位必(もし)相去ること己に近ければ、則ち真氣は真氣に通ず、通ぜざれば附會無きに如かざる也。譬へば書法を觀る

が如く、必ず羲獻の顯はるる處藏(かく)るる處を知りて、觀聲色無き處に至り、然る後に筆を下せば、自爾(おの)ずから唐宋に伍せざらん。吾の註杜を觀るに、十三經の註の其の半ばを失せるを嘆かざるに能はざる也。

嗚呼(ああ)、世の古今の人物の忠佞賢否を揣摩し、輕がるしく之が評を為すは、天地の間寧(なん)ぞ十三經の半ばに止まらん乎。

杜甫詩に注を施す者は數十家を下らないが、その半分はこじつけである。學者は讀書著述に取り組み杜甫を理解するが、その立場が杜甫から離れていなければ杜甫の真氣(本質的な氣)は注釈者の真氣に通ずる。通じないならば牽強付会しない方がよい。例えば書法を鑑賞するように、必ず王羲之・王獻之の表面的な部分や隠れている部分をもとに理解し、物事への見方が物質的現象を超えた境地に至り、その後で筆を下せば、自然と唐宋に与するものとはならない。私が杜甫詩の注を見るに、十三經の注の半分が

その解釈を誤っているのを嘆かざるをえないのと同じである。
ああ、世間で古今の人物の忠臣佞臣・賢者愚者を深く検討するも輕率にこれらに評価を下しているが、この世の中で(誤った解釈を下しているのは)どうして十三經の半ばだけであろうか。

注

跋杜詩虞趙注 虞は虞集のこと。虞集 元の學者。字は伯生、号は道園、江西臨川の人。吳澄に学び、都に出て国子助教となる。文宗に寵遇され、翰林院と奎章閣の諸官を歴任。詩は唐詩の格調を主とし、楊載、范梈、揭傒斯らと併せて、元の四大家と称される。趙は、趙沔のこと。趙沔、元朝後期から明朝初期の學者。字は子常、安徽休寧の人。祖父は、南宋の浦江稅官であった趙彌孝。虞趙の杜詩の注としては、「杜工部七言律詩二卷・五言律詩二卷 唐・杜甫撰 元・虞集 注七言 元・趙沔 注五言 明正徳九年刊本」などがある。

牽合 無理なこじつけ。『新唐書』文藝傳下・李賀：「毎旦日出、騎弱馬、從小奚奴、背古錦囊、遇所行、書投囊中。未始先立題然後為詩、如它人牽合程課者。」

少陵 杜甫を指す。杜甫が少陵の布衣、少陵の野老と号したので、杜少陵と称せられる。少陵は長安近郊の地名。杜甫の遠い祖先とされる晋・杜預の出身地。

地位 立場。『管子』五行：「治祀之下、以觀地位。」尹之章の注に「理於祭祀之時、於其所祭之下、觀知地位之尊卑也。」とある。

附會 追隨。『漢書』酈食其叔孫通等傳贊：「從容平勃之間、附會將相以彊社稷、身名俱榮、其最優乎。」

義獻 王羲之、王獻之のこと。

聲色 中村元『仏教語大辞典 縮刷版』（東京書籍、二〇一〇）によれば、声色とは、感覚されるもの。色・声・香・味・触・法の六塵（物質的現象）のうち、初めの二つをあげて他の四つを含めたもの、という。

自爾 自然と。北魏 酈道元『水經注』 漆水…「東江又西、與利水合…：名曰韶石、古老言昔有二仙、分而憩之、自爾年豐、彌歷一紀。」

十三經 『易経』『書経』『詩経』『周礼』『儀礼』『礼記』『春秋左氏伝』『公羊伝』『穀梁伝』『論語』『孝経』『爾雅』『孟子』のこと。

揣摩 研究。検討。唐 楊炯『王勃集』序…「揣摩三古、開闡八風。」

忠佞 忠臣と佞臣。『北史』高閻傳…「孝文又引見王公以下於皇信堂、令辨忠佞。」

賢否 賢者と愚者。

天地 天下。『文選』張衡「南都賦」…「方今天地之睚刺、帝亂其政、豺虎肆虐、真人革命之秋也。」 李善の注に「天地、猶天下也。」とある。

8 跋三王帖 「王鐸畫論訳注（二）」第二章十二

9 跋李成蜀山卷

余得此卷於都下、喜數日。雖然、此非都下可觀物也。都下車馬攘逐功名之場、轟轟蟲蟲。他日入伏牛谷、竹杖草履、據石、於仙花澄潭之間、千丈

群松、一兩兩野麋、飲清泉而歌紫芝、然後展玩倘佯、庶幾不辱此丘壑耳。

李成の蜀山卷に跋す

余は此の卷を都下に得、喜ぶこと數日なり。然りと雖も、此れ都下の觀る可き物に非ざる也。都下は車馬攘逐せる功名の場にして、轟轟蟲蟲。他日 伏牛谷に入り、竹杖草履にして、石に據り、仙花澄潭の間、千丈の群松、兩兩の野麋あるに於いて、清泉を飲み紫芝を歌ひ、然る後に展玩して倘佯すれば、此の丘壑を辱めざるに庶幾（ちか）し耳。

私はこの画軸を北京で手に入れ、數日間も喜びが続いた。ところが、この画軸は北京における見るべき優品ではない。（元の所持者である孫承澤は、元人の模写ではないかと言っている。）現在、北京は車馬が激しく行き交う功名の場で、喧騒甚だしい。いつか、伏牛谷に分け入って、竹の杖をつき草履を履いて、石に寄りかかり、仙界の花が咲く澄んだ淵の間、高い松の

木々、つがいいで歩く鹿のいるところで、清らかな泉の水を飲み、隠棲の素
晴らしさを歌う紫芝歌を歌う生活をし、その後この画卷を開き、画中を
逍遙すれば、この絵に描かれた山水を辱めることにはならないだろう。

注

跋李成蜀山卷

『王鐸年譜長編』によれば、順治二年（一六四五）の十月、
王鐸は北京に到着した。その年の冬に、王鐸は古觚を孫承澤所蔵の李成「寒
林図」軸と交換したという。『石渠寶笈續編』に王鐸の跋文が見られ、「李
成寒林圖、琅華館藏。乙酉識。孟津王鐸家珍。」と記される。孫承澤「庚子
銷夏記」卷三「李成寒林圖」に、「余於滄桑後覓得大幅山水一幀、稍乏天韻、
疑是元人臨本、孟津王氏以古觚易去。」とある。現在、李成「寒林図」軸は
台北故宮博物院に所蔵されている。『擬山園選集』（詩集）七言絶句 卷三「見
李成蜀中山水卷懷友」に「層巒高山憶數君、巴雲蜀水此中分。等閒不敢躡
踏看、恐有峽猿靜夜聞。」という詩がある。

李成 李成、字は咸熙。青州益都の人。五代宋初の文人画家。唐の宗室の
一族。

都下 都。ここでは、北京。『三國志』吳志呂據傳：「又遣從兄憲以都下兵
逆據於江都」

車馬 車と馬。『詩經』小雅十月之交：「擇有車馬、以居徂向。」

功名 功績と名声。『莊子』山木：「削跡損勢、不為功名。」成玄英の疏に
「削除聖跡、損棄權勢、豈存情於功績、以留意於名譽。」とある。

轟轟 喧騒。韓愈「此日足可惜贈張籍」詩：「飲食豈知味、絲竹徒轟轟。」
蟲蟲 熱気の籠るさま。『詩經』大雅雲漢：「早既大甚、蘊隆蟲蟲。」毛傳
に「蟲蟲而熱。」とある。

竹杖 竹でできた杖。『漢書』西域傳贊：「睹犀布、瑇瑁則建珠崖七郡、感
枸醬、竹杖則開牂柯、越嶲。」

兩兩 兩方。対。『史記』天官書：「魁下六星、兩兩相比者、名曰三能。」
野麋 獐。ノロジカ。鹿に似て、角が小さい。朝鮮・中国東北部に住む。

唐王建「隴頭水」：「隴東隴西多屈曲、野麋飲水長簇簇。」

紫芝 紫芝歌。漢の高祖が四皓（東園公、綺裏季、夏黃公、用里先生）を
召したところ、彼らは応じないで天を仰ぎ歎じて作ったという。歌詞は「莫
莫高山、深谷逶迤、曄曄紫芝、可以療飢、唐虞世遠、吾將何歸、駟馬高蓋
其憂甚大、富貴之累、人不如貧、賤之肆志、乃共入商。」である。

倘佯 ぶらぶらと歩く。逍遙。『文選』宋玉「風賦」：「然後倘佯中庭、北上
玉堂。」李善の注に「倘佯、猶徘徊也。倘、音常。」とある。

庶幾 かもしれない。『史記』秦始皇本紀：「寡人以為善、庶幾息兵革。」
丘壑 山陵と溪谷。山水。宋王安石「九井」詩：「山川在理有崩竭、丘壑
自古相盈虛。」

10 東雲駒求題墨莊樓圖

東洗心公、吾家數世交也。鴻學抱甌、淳行真內、詞賦為渣、今世所鮮。
曾以墨莊樓徵予詩、寄鴛鴦譜一寫、時余方弱冠、迨致詩、而公溢然矣。

今公仲嗣雲駒、其學弘肆道本、不第綴響續言也。北都數數洽杯罍、出朱

伯明寫墨莊樓圖。嗟乎、斯樓也、非洗心徵詩之樓耶。浴雨吹林、曉山旭絡、髮髯樓內、垂曜昭識、微笑猶存、餘香不歇、不可想見洗心于煙雲蒼蒼之中乎。

華風在目、蕙嘆彌深、余弱冠已去三十年、不及觀于五時三峰、而締交于雲駒、略觀于圖書黛色、不逅而逅、不足以自釋也歟。

於戲、墨莊餘書、不復飄零、山木蒼翠、寒風蕭瑟。我情如何。

東雲駒（東肇商）「墨莊樓圖」に題せんことを求む

東洗心公（東文多）は、吾が家の數世の交也。鴻學にして抱甌、淳行にして内に寅（つつし）み、詞賦を渣と為し、今世に鮮（すくな）き所なり。

曾（かつ）て墨莊樓を以て予に詩を徵し、『鴛鴦譜』一写を寄す、時に余は方（まさ）に弱冠たり、詩を致すに迨（およ）びて、公は溘然たり矣。

今 公の仲嗣の雲駒、其の學は弘肆にして道本、第だに響きを綴（つづ）り言を縞（つむ）ぐのみならざる也。北都に數數杯罍を治（うるほ）すに、朱伯明寫『墨莊樓圖』を出（いだ）す。嗟乎、斯の樓也（や）、洗心徵詩の樓に非ざる耶（や）。浴雨吹林、曉山旭絡、髮髯たり樓内に、垂曜昭（あき）らかに識し、微笑猶ほ存し、餘香歇（や）まずして、洗心を煙雲蒼蒼の中に想見す可からざらん乎（か）。

華風目に在るも、蕙嘆くこと彌いよ深し、余は弱冠已に去ること三十年、五時三峰に觀（あ）ふに及ばざるに、而るに雲駒に締交し、略ほ圖書黛色に觀（あ）ふ、逅（あ）はずして逅（あ）ふは、以て自ら釋（ゆる）すに足らざらん也歟。

於戲（ああ）、墨莊に書を餘し、復た飄零せず。山木は蒼翠、寒風は蕭瑟。我が情如何。

東文多は、我が家と何世代にも及ぶ交流があった。彼は博學であったがそれを顕示することなく、行いは人情に厚く、内面は慎み深く、詞賦などの文学作品を残るかすとみなした。今の世に東文多のような人はいない。以前、東文多は私に墨莊樓を題として詩を求められたので、『鴛鴦譜』一卷を寄せた。当時、私は成人したばかりであった。詩を送り届けると、東文多は急逝された。

今、東文多の次男東雲駒は、博識で道徳の本質を心得ており、東文多の声や言葉伝える以上の人であった。北京で幾度も酒を酌み交わしたところ、朱伯明「墨莊樓図」を出してきた。ああ、この樓閣は、東文多が私に詩を求めた樓ではないか。雨あがりの林には風が吹き、明け方の山には朝日がかかり、まるで樓内には、明かりが差し込み人の姿もはっきりと分かり、東文多の微笑みは今も存し、その余香も尽きないかのようで、東文多の姿を雲霧のかかった山林の中に想像しえないことがあろうか。

墨莊樓周辺の鮮やかな山霧は今も私の目に在るが、知人である東文多どのを失ったことで、私の嘆きも益々深まる。私が成人してから既に三十年が経過し、東文多の故郷である陝西の五時原、華山の三峰で東文多どのにお会いするに至らなかったが、東雲駒と交り結び、「墨莊樓図」という絵画によって邂逅したということが出来た。東文多に邂逅せずとも彼に絵画によって邂逅したという事は、自ら心を和ませるに十分ではないか。ああ、墨莊樓図には我が書が加わり、（東雲駒によって大事にされ）二度と落ちぶれることはない。画中の山の木々は青々と茂り、寒風が寂しく吹き渡っている。（それを見ると）わが感情はいかんともしがたい。

注

東雲駒求題墨莊樓圖 東雲駒は、東肇商のこと。字は雲駒、文多の子。崇

禎七年（一六三四）に死去した東雲駒の為に書いた『擬山園選集』（文集）

卷四十八「東雲駒傳」に、「東生雲駒肇商、華州人。其上世科第不及數。父

高士、諱文多、號洗心、博洽能文、有譽處於關中。」とある。『王鐸年譜長

編』によれば、万曆三十九（一六一二）、王鐸二十歳の時に、先代から交際

のある東文多（洗心）が王鐸に墨莊樓の詩を求めたという。また、跋文中に

「余弱冠已去三十年」とあるが、この題跋の依頼者である東雲駒は崇禎七

年（一六三四）に没しており、題跋の依頼は彼の没年以前である。したが

って、「余弱冠已去三十年」は、「二十年」の誤りの可能性がある。

鴻學 學問に深く通じている人。唐・舒元興「問國學記」…至於西、有高門、

門中有廈屋。問之、曰…此論堂也。予愧非鴻學、方論、不敢入。」

抱甌 包み束ねて箱の中に置く。『書』禹貢…「包甌菁茅。」孔穎達の疏に引

く鄭玄注に「甌、猶纏結也…重之、故既包裹而又纏結也。」蔡沈の集傳に

「甌、匣也…既包而匣之、所以示敬也。」とある。

淳行 人情に厚い。

詞賦 辭賦。後に賦体文学を指す。また、詞と賦。南朝・梁・劉勰『文心雕

龍』辨騷…「然其文辭麗雅、為詞賦之宗。」

弱冠 男子二十歳の異称。『禮記』曲禮上…「二十曰弱冠。」孔穎達の疏

に「二十成人、初加冠、體猶未壯、故曰弱也。」とある。

溘然 急逝。南朝・梁簡文帝「與劉孝儀令」…「所賴故人、時相媿偶、而此子

溘然、實可嗟痛。」『擬山園選集』（文集）卷四十八「東雲駒傳」に、「乙卯

一年内、母席孺人歿、頃之、洗心公又歿。」とある。乙卯、すなわち万曆四

十三年（一六一五）、王鐸二十四歳の時である。

弘肆 広くほしいまま。學問文章の形容。語本・唐・韓愈「進學解」…「先生之於文、可謂閱其中而肆其外矣。」

道本 立身行道、經世致用の根本。『周禮』地官師氏…「以三德教國子。一

曰至德以為道本、二曰敏德以為行本、三曰孝德以知逆惡。」

綴響綺言 『藝文類聚』卷十三・帝王部三・謝莊・孝武帝哀策文「綴響蘭

深、緝言瓊秘。」

杯肆 古代の酒器。明・宋應星『天工開物』珠玉…「所謂連城之璧、亦不易

得。其縱橫五、六寸無瑕者、治以為杯肆、此已當時重寶也。」

浴雨吹林 唐・李頎「聽重天彈胡笳兼寄語弄房奴事」に、「幽音變調忽飄灑、

長風吹林雨墮瓦。」とある。

髻髻 ぼんやりしている。『楚辭』遠游…「時髻髻以遙見兮、精皎皎以往來。」

洪興祖の補注に「說文云、髻髻、見不諳也。」

垂耀 輝き。「垂耀」としても作る。漢・王充「論衡」說日…「數星之質百里、

體大光盛、故能垂耀。」

微笑 微笑み。戰國・楚・宋玉「登徒子好色賦」…「含喜微笑、竊視流眄。」

煙雲 雲霧。漢・枚乘「七發」…「於是榛林深澤、煙雲闐冥、兕虎並作。」

青蒼 山林。宋・陸游「過石靈三峰」詩之一…「拔地青蒼五千仞、勞渠蟠屈

小詩中。」

蕙嘆 芝焚蕙嘆のこと。芝草が焚かれると蕙草が傷嘆する。同類であるこ

とにより、同じ不幸に遭い、悲傷することを比喩する。晉・陸機「嘆逝賦」…

「信松茂而柏悅、嗟芝焚而蕙嘆。」

五時 陝西省鳳翔縣。

三峰 華山の蓮華、毛女、松檜三峰。

締交 交際。南朝・梁・沈約「麗人賦」…「有客弱冠未仕、締交戚里。」

自釋 自分で気を落ち着かせる。北齊 顔之推『顏氏家訓』勉學…「元帝在江荆間、復所愛習、召置學生、親爲教授、廢寢忘食、以夜繼朝、乃至倦劇愁憤、輒以講自釋。」とある。

也歟 疑問を表す語氣助詞。『論語』雍也…「仲由可使從政也與。」

飄零 飄落。漢 司馬相如「美人賦」…「流風慘冽、素雪飄零。」

蒼翠 樹木が青々と茂っていること。南朝 齊 謝朓「冬日晚郡事隙」詩…

「蒼翠望寒山、崢嶸瞰平陸。」

寒風 北風。『呂氏春秋』有始…「何謂八風…北方曰寒風。」

蕭瑟 風が音を立てて木々を吹き渡るさまのこと。宋 蘇軾「仙都山鹿」

詩…「長松千樹風蕭瑟、仙宮去人無咫尺。」

11 跋蘇書杜牧賦

盧九台以蘇書杜牧阿房賦命題。牧之此賦、氣薄力脆、大似宋元。全集、

獨原十六衛、燕將錄、兵論、罪言、送處士序、上司徒書、數絶句為勝。唐

書牧系出於富陽侯預、作通典佑、拾遺甫、事蹟炳綯、蘇書經緯之、為其文

詞歟。為其幹濟歟。

於戲、翰墨其細也、事之細者、九台猶留神若此。況軍旅邊圉劬債帥、斥

輓將、掃魍魎、平塊圪、安危治亂之所關哉。然則賦不精、而後人哀後人之語、誦之有不盡之情、殆有益于人。國也天下事、翰墨詩賦、竹頭木屑。不作二觀可矣。

盧九台は蘇書杜牧「阿房賦」を以て題を命ず。牧の此の賦は、氣薄く力脆く、大いに宋元に似たり。全集は、獨だ「原十六衛」、「燕將錄」、「兵論」、

「罪言」、「送處士序」、「上司徒書」、數絶句のみ勝と為す。唐書牧の系は富陽侯預に出で、通典を作れる佑、拾遺の甫は、事蹟炳綯たり、蘇の書して之を經緯するは、其の文詞の為め歟。其の幹濟の為め歟。

於戲、翰墨は其れ細也、事の細なる者も、九台猶ほ留神すること此くの若し。況んや軍旅の邊圉に債帥を劬(のぞ)き、輓將を斥け、魍魎を掃(は)き、塊圪を平げ、危を安んじ亂を治むるの關する所においてを哉(や)。然らば則ち賦は精ならざるも、而るに「後人 後人を哀しむ」の語、之を誦するに盡きざるの情有りて、殆んど人に益する有り。國也(や) 天下の事

にして、翰墨詩賦は、竹頭木屑なり。二觀と作さざるは可なり矣。

盧象昇どのがわたくしに、蘇軾書・杜牧「阿房宮の賦」に題せんことを命じた。杜牧のこの賦は氣力が乏しく脆弱であり、宋元の散文に非常に似ている。杜牧の全集の中ではただ「原十六衛」、「燕將錄」、「兵論」、「罪言」、「送處士序」、「上司徒書」、数絶句のみが良い。「新唐書」宰相世系表で杜牧の家系は当陽侯の杜預を出自とし、『通典』の著者である杜佑、左拾遺に任官した杜甫は、その事績が輝かしく、蘇軾が書いてこれらを整理したのは、杜牧の文章が素晴らしいのためであろうか。杜牧の功績が素晴らしいのためであろうか。

ああ、翰墨（書画や詩賦）は細事である。細事ではあるが、盧象昇はどのように留意している。まして、国境地帯で軍隊が賄賂でのし上がった將軍を駆逐し、軟弱な將軍を退け、魍魎魍魎のような敵軍を一掃し、危機や動乱を平定することにおいてはおおさら留意すべきである。そうであるならば、賦が精練されていなくとも、杜牧「阿房宮の賦」の「後世の人が過去の王朝の滅亡を憐れむ」は、これを声に出して朗誦する際に言い尽くせない気持ちを生じ、おおむね人に有益なものである。国家は天下の一大事であり、書画や詩賦は将来役立つかもしれないが、竹の切れ端木屑のような瑣末なものである。（しかし）それらを仏教における事觀と理觀のように、全く別個のものに見なさなくとも良いのである。

注

盧九台 盧象昇、字は建斗、号は九台。江南宜興の人。天啓二年（一六二

二）の進士。戸部主事及員外郎、大名知府、大名兵備道などを歴任。崇禎十二年（一六三九）十二月、清軍との交戦で戦死した。

杜牧阿房賦 杜牧『樊川文集』卷一「阿房宮賦」。

原十六衛 杜牧『樊川文集』卷二「原十六衛」。

燕將錄 杜牧『樊川文集』卷三「燕將錄」。

兵論 『唐書』杜牧傳に、「牧剛直有奇節、不為齷齪小謹、敢論列大事、慨然最喜論兵。」とある。漢・曹操等撰 唐・杜牧等撰『十一家註孫子』がある。

罪言 杜牧『樊川文集』卷二「罪言」。

送處士序 杜牧『樊川文集』卷七「送薛處士序」。

上司徒書 杜牧『樊川文集』卷八「上李司徒相公論用兵書」。

唐書牧系出於當陽侯預 『新唐書』卷七十二 宰相世系二上・襄陽杜氏に、

「襄陽杜氏出自當陽侯預少子尹、字世甫、晉弘農太守。二子、緝、弼。緝字弘固、奉朝請。生襲、字祖嗣、上洛太守。襲生標、標字文湛、中書侍郎、池陽侯。生沖、字方進、中書侍郎、襲池陽侯。生洪泰、字道廓、南徐州刺史、襲池陽侯。二子、祖悅、頤。」とある。杜牧も表中に見える。

通典 唐・杜佑の著。二百卷。劉秩『政典』をもとに、上代から唐の玄宗に及ぶ歴代王朝の諸制度の移り変わりを記す。杜佑、字は君卿。諡は安簡。西晋・杜預の子の杜尹の末裔。杜牧の祖父。

炳綯 明るく美しい。南朝梁 江淹「空青賦」：「翠燦軒室、蔥鬱臺殿、雜蛟龍之文章、發麟鹿之炳綯。」

經緯 整え治める。『左傳』昭公二十九年：「夫晉國將守唐叔之所受法度、以經緯其民。」

文詞 文辞のこと。文章。『史記』伯夷列傳：「余以所聞由光義至高、其文

辭不可概見、何哉。」

幹濟 成果。『易』乾「貞者、事之幹也」孔穎達の疏に「言天能以中正之氣成就萬物、使物皆得幹濟。」とある。

留神 注意。気を配る。『漢書』谷永傳…「此五者、王事之綱紀、南面之急務、唯陛下留神。」

軍旅 軍隊。『周禮』地官小司徒…「五人為伍、五伍為兩、四兩為卒、五卒為旅、五旅為師、五師為軍、以起軍旅、以作田役。」

邊圍 国境地帯。宋蘇軾「張文定公墓誌銘」…「太祖不勤遠略、如夏州李彝興、靈武馮暉、河西折御卿、皆因其酋豪、許以世襲、故邊圍無事。」

債帥 多額の賄賂によつて將軍という高い地位を得た人を指す。『舊唐書』高瑀傳…「及瑀之拜、以内外公議、搢紳相慶曰、韋公作相、債帥鮮矣。」

輕將 軟弱な將軍。輒は軟に同じ。『集韻』…「乳兗切、欸音軟。」

魍魎 古代伝説中の山水・木石の精気から出る怪物。『孔子家語』辨物…「木石之怪變魍魎。」

塊札 塊札。広くて果てしない。『史記』屈原賈生列傳…「大專繁物兮、塊札無限。」裴駟集解に引く應劭曰く「其氣塊札、非有限齊也。」

後人哀後人 杜牧「阿房宮の賦」に、「秦人不暇自哀、而後人哀之、後人哀之而不鑒之、亦使後人而復哀後人也。」(秦人が自分を嘆く暇も無く、秦は滅び、かえつて後世の人が秦の滅亡を憐れんだ。しかし、後世の人も秦の滅亡を教訓にしなかった。(そのため、王朝は次々と滅び)同様に後世の人に過去

の王朝の滅亡を憐れまれるのだ。)とある。

竹頭木屑 竹頭は、竹の切れ端。木屑は、木の切りくず。晉の陶侃が、造船の際に出た木や竹の屑を、後の用に役立てたという故事から、細かなこ

とも疎かにしない喩え。南朝宋劉義慶『世說新語』政事…「陶公」作荆

州時、敕船官悉録鋸木屑、不限多少。咸不解此意。後正會、值積雪始晴、聽事前除雪後猶濕、於是悉用木屑覆之、都無所妨。官用竹皆令録厚頭、積之如山、後桓宣武伐蜀、裝船、悉以作釘。」

二觀 仏教語。事觀と理觀。事觀とは、仏、浄土などの具体的な姿を対象とするもの。理觀とは、普遍的な真理そのものを観すること。

12 跋聖教序 「王鐸書論詠注(二)」第二章六

13 題玄宰山水卷

畫之道通于禪、非靜深不能詣也。故人爭氣負高、與夫聳塵動之想。至

于作畫、則為之隱固其氣焉。余嘗甚癖于此、恨不能如玄宰匝天無縫象冥周

神、此自鈍器、緝繁呶諸塵、與虛沖靜遠者不共一器也。今而後幾幾乎欲

沈其心矣。

玄宰の山水卷に題す

畫の道は禪に通じ、靜深に非ざれば詣(いた)ること能はざる也。故に

注

人の争気負高と、夫の彝鷺塵劬の想與(と)は、作畫に至りて、則ち之れが為に其の気を隠し固む焉。余嘗て甚だ此に癖ありて、玄宰の匠天無縫にして象は冥にして神を周すが如く能はざるを恨む、此れ自ら鈍器にして、緬(おおつな)もて呶呶たる諸塵と繋がり、虚冲靜遠なる者と一器を共にせざるゆえ也。今より而後其の心を沈めんと欲するに幾(ちか)きを幾(こひねが)ふ矣。

題玄宰山水卷 『王鐸年譜長編』では、本跋文は崇禎五年(二六三二)に書かれたものとして取り扱っている。「玄宰」は、董其昌の字。董其昌(一五五・一六三六)は明代を代表する文人、書家、画家。中国絵画を南北の二系統に分ける南北二宗論を説き、南宗画を正統とした。その書画論は、揚無補編『画禪室隨筆』に纏められている。

争気 向上を志す。『荀子』勸學：「有争氣者、勿與辯也。」

負高 自己の能力を自負する。南朝宋・鮑照「登大雷岸與妹書」：「南則積

山萬狀、負气争高」

彝鷺 駆け回る。『楚辭』劉向「九嘆怨思」：「背玉門以彝鷺兮、蹇離尤而乾

詬。」王逸の注に「言「背玉門奔馳而去者。」とある。

塵劬 煩わしく骨が折れる。

匠天 満天。

無縫 衣服に針の縫い目がない。晉楊方「合歡詩」之一：「衣其雙絲絹

画の道は禪に通じ、心が静寂深遠でなければ真理に到達できない。それ故に、人の、他人と競い自己の能力を自負するあり方と、駆け回り煩雑で骨が折れる想念は、作画に至って、このためにその氣質を内に秘めて固め閉じ込めるのである。私は嘗て絵画創作を偏愛しており、董其昌のように、世界全体が継ぎ目のない一体となり、物象を達観して精神を充満させるような境地に到達できないことを残念に思っていた。これは私自身が愚鈍で、大きな綱で騒がしい煩惱を引き起す五塵(色、声、香、味、触)と繋がり、欲望を排除し冷静で深遠なものとして一体化しなかったからである。今後、ほとんど心を静めるような境地に到達できればと願っている。

寢共無縫綯。」

嗷嗷 口数が多くやかましい。唐柳宗元「與韋中立書」：「僕漸不喜聞

豈可使嗷嗷者早暮拂吾耳、騷吾心。」

諸塵 仏教語。色、聲、香、味、觸の五つの塵を指す。唐王建「原上新居」

詩之七：「焚香回居士、無計出諸塵。」

虛沖 欲望などを捨てて、静かに落ち着いているさま。晉張華「壯士篇」：

「年時俯仰過、功名宜速崇。壯士懷憤激、安能守虛衝。」

靜遠 無欲で深遠なさま。

今而後 而今而後。今より以後。これから。『論語』泰伯：「而今而後、吾

知免夫。」

14 跋吳道子佛像

春過孫奉常軒中、見吳道子畫、佛趺坐、僧徒待左右、下蹲一辟邪伸一爪、對坐居士長髯、天女持花精神顧盼、皆生動而深寂、不可窺者自若也。

夫畫畫之淫巧者、徒蕩心散樸無益也。畫出語言不用之秘、能令人沈聞有

會。北海不競華、不引喧、其淵然有所通也、所以晤對莊嚴、不在區區藝能之工、殆有靈合于畫之先歟。

如以畫論千古第一絕技、其可窺者止足頂禮。至于無像無形、無語言而精神生動、在其下矣。畫之可摹可思議者、又其下矣。況于蕩心散樸者乎。

吳道子の佛像に跋す

春、孫奉常の軒中を過（よぎ）り、吳道子の畫を見るに、佛は趺坐し、僧徒は左右に待し、下蹲せる一辟邪は一爪を伸し、對坐せる居士は長髯にして、天女は花を持ち精神ありて顧盼し、皆生動にして深寂、窺がふべからざる者自若たる也。

夫れ畫畫の淫巧なる者は、徒（いたづ）らに蕩心散樸にして無益也。畫は語言の用ゐざるの秘に出で、能く人をして沈聞有會せしむ。北海は華を競はず、引喧せず、其の淵然として通ずる所有る也、晤對すること莊嚴なる所以（ゆゑん）にして、區區たる藝能の工なるに在らず、殆んど靈の畫の先に合する有る歟。

如し畫を以て論すれば千古第一の絶技にして、其の窺ふべき者は止だに頂禮するに足らんや。無像無形、無語言にして精神生動するに至りては、其の下に在り矣。之を畫きて摹すべく思議すべき者は、又た其の下なり矣。況んや蕩心散樸なる者に于いてを乎。

順治三年の春に孫承沢の自宅に立ち寄り、吳道玄の画を鑑賞したが、仏は結跏趺坐し、僧は仏の左右に控え、その下で蹲る靈獸は爪を伸ばし、向かい合つて座る居士は髯を長く伸ばし、天女は花を持ちながら潑刺として右顧左眄し、全て生き生きとしているが奥深く靜寂で、計り知れないもの

がそこに存在していた。

そもそも、畫画の技巧的なものは、無駄に心を惑わし素朴さを失ったもので用をなさない。画は言葉を使わない神秘より出るもので、人に静寂の中で真理を会得することを可能にさせる。孫承沢は華美な繪画を重視せず、また繪画を所蔵していることを宣伝することもない。彼が深く繪画の真理に通じている点こそが、繪画に嚴肅に對面している理由であつて、それは僅かな技芸の巧妙さにはなく、ほとんど靈魂が繪画を超えた領域に一致するという点にあるといえようか。

もし吳道子を繪画の点で論ずるならば千古第一の絶技であり、この作品から窺ふことのできる全体像は本当に崇め奉るに足る以上のものである。姿や形が無く、言葉で表現することもできないが、精神が生きて生きとしてゐるものには、その下に位置する。画に描いて模倣でき思考可能なものは、さらにその下に位置する。ましてや、心を惑わし素朴さを失ったものはさらにその下である。

注

跋吳道子佛像 吳道子は、唐の画家の吳道玄。陽翟（河南禹県）の人。生没年不明。初名を道子といい、後に道玄と改めた。小官吏であつたが、玄宗皇帝に禁中に召されて内教博士を授けられる。画は人物、仏像、鬼神、禽獸、山水、台館、草木と広範囲に渡り、なかでも道釈画を最も得意とした。『王鐸年譜長編』によれば、本跋文は、順治三年（一六四六）春、王鐸は周亮工と共に孫承澤の書齋を尋ね、孫承澤所蔵の吳道子佛像を鑑賞した際の跋であるという。

孫奉常 孫承沢のこと。孫承澤（一五九三・一六七六）、字は耳北、号は北

海、退谷、山東益都の人。明末清初の政治家、收藏家。著書に『春明夢余錄』『天府廣記』『庚子消夏記』等がある。

跌坐 足を組み合わせて座ること。唐王維「登辨覺寺」詩「輕草承跌坐、長松響林聲。」

辟邪 古代伝説中の靈獸。『急就篇』卷三「射魃辟邪除羣凶。」顏師古の注に「射魃、辟邪、皆神獸名……辟邪、言能辟御妖邪也。」とある。

居士 学徳は高いが出仕していない者。『禮記』玉藻「居士錦帶。」鄭玄の注に「居士、道藝處士也。」とある。

天女 天上の女神。『魏書』序紀聖武帝「歛見輜軿自天而下。既至、見美婦人……對曰、我天女也。」

生動 （繪画などが）生き生きと真に迫る。南朝齊謝赫『古畫品錄』序「六法者何。一氣韻生動是也。」

自若 普段と変わらず、動する所が無いさま。『國語』越語下「自若以處以度天下、待其來者而正之、因時之所宜而定之。」

淫巧 度を越した技巧。漢桓寬『鹽鐵論』本議「有山海之貨而民不足於財者、不務民用而淫巧衆也。」

蕩心 心を乱す。『新唐書』劉蕡傳「錦繡雕鏤不養於私、則無蕩心之巧矣。」

散樸 素朴さを失う。『漢書』循吏傳黃霸「澆淳散樸、並行偽貌、有名亡實、傾搖解怠。」

無益 役に立たない。『書經』旅獒「不作無益害有益、功乃成。」

語言 言葉。『大戴禮記』五帝德「吾欲以顔色取人、於滅明（澹臺滅明）邪改之、吾欲以語言取人、於予（宰我）邪改之。」

沈闐 闐は、闐の異体字。闐沈は、静寂。宋葉適「送徐洞清秀才入道」詩「月華滿庭蕪、闐沈霜宇峭。」

引喧 やかましい。うるさい。晋 丘道護「道士支曇詵」：「幽境混黙、人肆喧引。」

淵然 静かなさま。柳宗元「鈞錡潭西小丘記」：「悠然而慮者與神謀、淵然而靜者與心謀。」

晤對 向かい合つて話す。宋 王謙「唐語林」豪爽：「又有少年、勢似疎簡自云、辛氏郎君、來謁丞相。於晤對之間、未甚周至。」

莊嚴 厳か。『百喻經』子死欲停置家中喻：「生死道異、當速莊嚴致於遠處而殯葬之。」

區區 僅かなことの形容。『左傳』襄公十七年：「宋國區區、而有詛有祝禍之本也。」

千古 遙か遠い昔。北魏 酈道元『水經注』睢水四：「追芳昔娛、神遊千古、故亦一時之盛事。」

絕技 卓越した技芸。『漢書』敘傳上：「逢蒙絕技於孤矢、班輸權巧於斧斤。」

頂禮 仏教における最敬礼。仏や尊者の前にひれ伏し、自分の頭を相手の足につけて拝する。北魏 曇鸞「贊阿彌陀佛偈」：「法身光輪遍法界、照世盲冥故頂禮。」

15 自畫紅梅跋

予在蘇竹塢、天池溪山韶秀、紅白梅艷冷相樸、樹幹年深、崖勢欹仄、奇倔異常。曾為張子作梅二幅、今在長安較之。

又經數載、雨中無事、據梧睡後、偶作紅梅數條出門、戎服象弭、淺輞高纛。回視竹塢天池、畫之所無也。且一畫何足論、而景物頓殊、予即不之奇

倔之致、求復見蘇山崖勢欹仄、載酒紅白間、安可得乎。付之季公弟、知予之老懷又若是。

自畫紅梅の跋

予蘇竹塢に在るに、天池の溪山は韶秀、紅白梅は艷冷にして相樸り、樹幹は年深く、崖勢は欹仄、奇倔にして常なるに異なれり。曾て張子の為に梅二幅を作るに、今は長安に在りて之を較ぶ。

又た數載を経て、雨中に事無く、梧に據りての睡後、偶たま紅梅數條の門を出づること、戎服象弭のごとく、淺輞高纛のごときを作す。竹塢天池を回視するに、畫の無き所也。且つ一畫は何の論するに足らん、而も景物頓に殊なれば、予即へ奇倔の致に乏しからざるも、復た蘇山の崖勢欹仄たるを見、紅白の間に載酒することを求むるも、安んぞ得可けん乎。之を季公の弟に付す、予の老懷又た是くの若きを知れ。

私は蘇州の竹塢にいた際、蘇州の天池山の山谷は麗しく、色鮮やかな紅梅と冷やかな白梅とが入り混じって咲き、梅の樹幹は年季が入っており、崖は高く険しく、その奇抜さは尋常ではなかった。以前、私は張定志の為に二幅の梅画を描いたが、今、私は北京で、これら二幅を見比べている。

さらに数年が経過し、雨の中やることなく、机に寄りかかって居眠りした後、たまたま紅梅の画を描いた。その画では、紅梅の数本の枝が門から飛び出て、軍服から弓矢が突き出たようであり、戦車の旗のようであつ

た。竹塢の天池山を回想するに、その素晴らしきは、画には無いものである。しかも、(実際の風景に比べるならば)一幅の絵画は論するに足りないものである。しかも、実際の風景は突然に変化するもので、たとえ私が奇抜な発想が多くあったとして、再び蘇州の天池山の崖の高く険しいさまを見、紅白の梅が入り混じる中で酒を携える機会を得ようと求めても、(同じような絵画を画ける機会)はどうして得られようか。この画を従弟の王鈔に与える。我が老年の思いがこの様であることを理解してほしい。

注

自畫紅梅跋 『王鐸年譜長編』によれば、崇禎十六年(一六四三)春、王鐸は天池山に遊んだという。『擬山園選集』(詩集)五律卷十三「天池山」に「獨旅春山寂、高林晚氣初。」とあり、五律卷十九に「天池山中北寺」、五律卷十に「登天池山」が見られる。天池山で遊んだ際、王鐸は梅を見て、張定志の為に二幀を作画した。『王鐸年譜長編』によれば、本跋文は順治四年(一六四七)五月に書かれたもので、王鐸は従弟の鈔の為に梅画を描いたという。

蘇竹塢 竹塢は、竹林が繁茂した山間の窪地。唐李德裕「重憶山居平泉源」詩：「逶迤過竹塢、浩淼走蘭塘。」この「蘇」について、『王鐸年譜長編』によれば、王鐸は、崇禎十六年二、三月の間に蘇州に至ったという。

天池 蘇州の天池山。
韶秀 麗しい。『新唐書』光王琚傳：「夏悼王一 生韶秀、以母寵、故鍾愛、命之曰一。」

艷冷 冷艶。唐丘為「左掖梨花」詩：「冷艶全欺雪、餘香乍入衣。」
樹幹 木の幹。晉嵇含「南方草木狀榕」：「榕樹、南海桂林多植之、葉如木

麻、實如冬青、樹幹拳曲、是不可以為器也。」

峽岫 峽は、山の高いさま。岫は、禿山、山の高いさま。

奇備 奇抜で聳え立つ様。

張子 張定志のこと。張定志、号は石叟、宜興の人。『擬山園選集』(詩集)五律卷十六に「北山東垣庵石叟」がある。

無事 することや仕事がない。『孟子』滕文公下：「士無事而食、不可也。」

據梧 机に寄りかかる。『莊子』齊物論：「昭文之鼓琴也、師曠之枝策也、

惠子之據梧也、三子之知幾乎。」成玄英の疏に「據梧者、只是以梧几而據之談說、猶隱几者也。」とある。

戎服 軍服。『漢書』匈奴傳下：「是以文帝中年、赫然發憤、遂躬戎服、親御鞍馬。」

象弭 象牙で裝飾した弓弣。『詩經』小雅採芣：「四牡翼翼、象弭魚服。」朱熹の集傳に「象弭、以象牙飾弓弣也。」とある。

棧輶 『詩經』秦風・小戎に「小戎棧輶、五檠梁輶。(兵車は、浅くて短く、輕便にできている。車の輶の上に曲がった横木には、五段巻きになって、あざやかな模様がある。)」とある。現代語訳は、高田真治『漢詩大系第一

卷 詩經上』(集英社、一九六六)を引用した。

高纛 軍中で用いる盛大で大きい旗。

回視 回想。宋蘇軾「答李端叔書」：「回視三十年以來所為、多其病者、

足下所見、皆故我非今我也。」

景物 風景。晉陸雲「大安二年夏四月大將軍出祖王羊二公」詩之一：「景物臺暉、棟隆玉堂」

載酒 酒を携える。『漢書』揚雄傳下：「家素貧、嗜酒、人希至門。時有好事者載酒餽從遊學。」

載酒 酒を携える。『漢書』揚雄傳下：「家素貧、嗜酒、人希至門。時有好事者載酒餽從遊學。」

載酒 酒を携える。『漢書』揚雄傳下：「家素貧、嗜酒、人希至門。時有好事者載酒餽從遊學。」

季公弟 従弟の鈔のこと。

老懷 老人の胸中。宋 楊萬里「和蕭伯和韻」…「桃李何忙開又零、老懷易感掃還生。」

南唐が滅亡したことを嘆くばかりだ。

注

16 跋米元章告夢帖 「王鐸書譚詠注（二）」第三章六

周文矩書郭令公單騎見虜圖 周文矩 五代南唐の宮廷画家。句容（江蘇省）の人。後主李煜に仕え、翰林待詔となる。山水、人物、仕女画に優れる。郭令公は、中国唐代の武將の郭子儀のこと。華州（陝西省）の人。安史の乱を平定、後に吐蕃の侵入をも退ける。郭子儀に関する賦として、宋代・秦觀「郭子儀單騎見虜賦」がある。虜は、異民族のこと。郭子儀は、唐代宗の永泰元年（七六五）十月、回紇と吐蕃の軍隊が長安の北の涇陽に迫った。当時、郭子儀は涇陽の守りに就いており、回紇と連合することで吐蕃を打ち負かす計略を建て、単身、回紇の陣に赴き交渉し和約を結んだ。これにより吐蕃は兵を引いた。

17 周文矩書郭令公單騎見虜圖

畫以工取妍、倍見英雄磊落之概、是以為難安社稷于渭、南唐何幸有此人哉。撫卷為之愴然。

周文矩の畫ける郭令公の單騎にて虜に見（まみゆ）るの圖

畫は工を以て妍を取り、倍して英雄磊落の概を見（あらは）す、是（こ

こ）を以て社稷を渭に安んじ難しと為すなり。南唐は何の幸か此の人有り

哉。卷を撫して之が為に愴然たり。

愴然 嘆く。『禮記』祭義…「出戸而聽、愴然必有聞乎其嘆息之聲。」

この画は技巧を駆使して艶やかさを表現し、唐の名將郭子儀の豪放磊落な氣概をより示している。そのため、この画は長安の地に唐王朝を保つことの難しさを表している。南唐には幸運にも周文矩という優れた画家がいた。画卷を撫でつつ（このような警世の才を有する画家が存在しながら）

18 題胡廷暉山水

茲幅高峰深邃、一人豆茅舍外、放情雲谿、有遺世離俗之心、為此者毋乃示人以遯義乎。蓋以富貴易危、凶懼隱伏、不如山林之靜適。五洲九坑、其

硯礮飛柱、玄豸沈晦有嘉祉也。昧者不知棲也、故知古人為畫有鑑戒存焉。
收畫者勿徒以為玩好、如以青翠妍媚、椒丘喬陟已耶、則失其義矣。

胡延暉の山水に題す

茲の幅は高峰深邃にして、一人 茅舎の外に豆たりて、情を雲谿に放ち、
遺世離俗の心有り、此れを為す者は母乃（むしろ）人に示すに遯の義を以
てする乎。蓋し富貴は危き易きを以て、凶懼して隱伏するは、山林の靜適
なるに如かず。五洲の九坑において、其の硯礮なる飛柱の玄豸にして沈晦
なるは嘉祉有る也。昧者は棲を知らざる也、故に古人の畫を為すは鑑戒の
存する有るを知る焉。

畫を收むる者は徒（いたづら）に以て玩好を為す勿（なか）れ、如（も
し）青翠の妍媚なる、椒丘の喬陟なるを以てする已（のみ）耶、則ち其の
義を失す矣。

この一幅の繪画は、高い峰が聳え空間に奥行きがあり、豆粒なような小
さな人物が一人茅葺の家の外にいて雲が湧く溪谷に思いを解き放っており、
世俗から脱却した心がある。この画を描いた者は恐らく隱遁の意を人に示
したのであるか。思うに、富貴は危機に陥り易いため、危機を恐れて隱
居するよりは、山林に隱棲し靜寂で心地よい状態にある方が良い。天下の
各地においては、高く聳える神山の物寂しくひっそりとした所に幸福があ
るのである。（しかし）道理に疎い者は隱棲を知らない。それゆえ、古人は
画を描いてそこに教訓を込めたことが分かるのである。

画を収集する者は空しく賞玩してはならない。もし青々とした美しい嶺、
高く険しい山の重なる連峰だけで評価するならば、その意義を失ってしま

う。

注

題胡延暉山水 胡延暉、元代の画家、呉興の人。趙孟頫と同郷。山水画に
優れる。伝存する作品に、「龍舟奪標圖」「春山泛舟圖」がある。

深邃（空間が）奥深い。『藝文類聚』卷六二に引く三國魏卞蘭「許昌宮
賦」に「同一宇之深邃、致寒暑於陰陽」とある。

茅舎 茅葺の家。『三國志』蜀志秦宓傳：「宓稱疾、臥在茅舎。」

豆 五代後梁荆浩「山水賦」：「凡畫山水、意在筆先、丈山尺樹、寸馬豆人。」

放情 思う存分。晉郭璞「遊仙」詩之三：「放情凌霄外、嚼藥抱飛泉。」

雲谿 雲や霧がゆらゆらと渦巻く溪谷。晉張協「七命」：「右崑風谷、左臨
雲谿。」

遺世 世間の事を捨てて顧みないこと。隱居。曹植「七啓」：「亦將有才人
妙妓、遺世越俗。」

離俗 俗世間から離れること。隱居。『韓非子』有度：「離俗隱居、而以作
非上、臣不謂義。」

母乃 おそらく、たぶん、くではないだろうか。『禮記』檀弓下：「君反其
國而有私也、母乃不可乎。」

遯義 『易』に「遯、亨、小利貞。」とあり、象傳に「遯亨、遯而亨也。剛
當位而應、與時行也。小利貞、浸而長也。遯之時義大矣哉。」とあり、象
傳に「天下有山、遯、君子以遠小人、不惡而嚴。」とある。つまり、この卦
を得た者が君子ならば、隱遁した方が良く、小人や小事からは遠ざかり、
身を厳正にする方が良いということ。

蓋以富貴易危 富貴是危機。『晉書』卷八五「諸葛長民傳」：「長民弟黎民輕

狡好利、固勸之……長民猶豫未發、既而嘆曰、貧賤常思富貴、富貴必履危機。今日欲為丹徒布衣、豈可得也。」宋蘇軾『蘇軾詩集』卷一五「宿州次韻劉涇」詩…「晚覺文章真小技、早知富貴有危機。」

凶懼 恐れる。『左傳』僖公二十八年…「師遷焉、曹人凶懼、為其所得者棺而出之。」杜預の注に「凶凶、恐懼聲。」とあり、楊伯峻の注に「説文、凶、擾恐也、則凶懼為同義詞平列、猶今言氣懼也。」とある。

隱伏 隠れる。潜伏。『易』説卦…「坎為水、為溝瀆、為隱伏。」孔穎達の疏に「為隱伏、取其水藏地中也。」とある。

靜適 静寂で心地良い。

九坑 九州の山。『楚辭』九歌大司命…「吾與君兮齋速、導帝之兮九坑。」蔣驥の注に「坑、崗同。」

硯礮 高く聳える様。南朝梁 江淹『横吹賦』…「故左崎嶇、右硯礮。」

飛柱 神山。『楚辭』王褒…「步余馬兮飛柱、覽可與兮匹儔。」王逸の注に「徘徊神山、且休息也。」とある。

玄豸 「豸」は、『玉篇』に「同宗寂。」とある。玄寂。空虚でひっそりとしている。三國 魏 嵇康「知慧用」詩…「大人玄寂無聲、鎮之以靜且止。」

沈晦 隠れて出現しない。『朱子語類』卷二九…「邦無道能沈晦以免患。」

嘉祉 幸福。『國語』周語下…「皇天嘉之、祚以天下、賜姓曰姒、氏曰有夏、謂其能以嘉祉殷富生物也。」韋昭の注に「祉、福也……以其能以善福殷富天下、生育萬物。」とある。

棲 止まる。『魏書』顯祖記…「棲心浩然。」

鑑戒 教訓を引いて、人を警戒させる。

玩好 玩弄。『周禮』天官大府…「凡式貢之餘財、以共玩好之用。」

青翠 緑が鮮明な様。北魏 酈道元『水經注』江水二…「西望狼山諸嶺、重

峰疊秀、青翠相臨。」

妍媚 美麗なさま。漢 邊讓「章華台賦」…「爾乃妍媚遽進、巧弄相加、俯仰異容、忽兮神化。」

椒丘 険しく高い丘。屈原「離騷」…「步余馬於蘭皋兮、馳椒丘且焉止息。」

喬陟 幾重にも重なる連峰。『列子』湯問「四方悉平、周以喬陟。」張湛の注に「山之重巒也。」とある。

19 跋小楷帖

丙戌春正月十三日、雲齋獲于小楷帖於報國寺、披至尾、廼王百穀家藏物也。

精氣完厚、發為光怪、得良田美宅不如得此。

小楷帖に跋す

丙戌春正月十三日、雲齋古楷帖を報國寺に獲て、披きて尾に至るに、廼

ち王百穀家藏の物也。精氣完厚にして、發して光怪を為す、良田美宅を得

るも此を得るに如かず。

順治三年（一六四六）正月十三日、張文光は北京の報國寺で古い楷帖を

入手した。開いて跋尾を見ると、王穉登家蔵の物であった。その精気は完壁で奥深く、神秘的な光を放っている。肥沃な田地や美しい住まいを得るよりも、この帖を得る方が良い。

注

跋小楷帖 本跋文は、順治三年（一六四六）正月十三日、張文光の為に書いたもの。

雲齋 『王鐸年譜長編』によれば、張文光、河南祥符の人、崇禎元年の進士という。

報國寺 北京の報國寺のこと。『王鐸年譜長編』によれば、同日、張文光と共に弟の鏞が所蔵する高克恭「雲横秀嶺図」を鑑賞し、跋を記した。時に鏞は都に来て同居したという。

王百谷 王穉登のこと。王穉登、字は百谷、伯谷、伯固。号は松壇道士。江蘇江陰の人。明代後期の詩人、書家。

精気 天地間の霊気。『易經』繫辭上：「精氣為物、遊魂為變、是故知鬼神之情狀。」

光怪 奇妙な現象。漢荀悅『漢紀』高祖紀一：「嘗從王媪、武負貫酒、每飲醉、留寢其家、上嘗見光怪、負等異之。」

良田 土壌が肥沃な田地。曹植「贈徐幹詩」：「良田無晚歲、膏澤多豐年。」

20 跋米友仁帖 「王鐸畫論詠注（二）」第二章十三

21 高彥敬畫

高尚書畫神氣淋漓、嶢嶢滋長、可謂造化從毫、天地無功。

高彥敬の畫

高尚書の畫は神氣淋漓、嶢嶢滋長にして、造化は毫に従ひ、天地無功と謂ふべし。

高克恭「雲横秀嶺図」は神秘的な氣が漲り、険しい山が高く聳え増大するようであり、画家の筆先に従って万物が生じ、現実の天地はこの創造に対して功績がないと言える。

注

高彥敬畫 高克恭、元の文人画家。字は彦敬。号は房山。父の高亨は元朝の世祖に重用され、高克恭も世祖、成宗、武宗に任せ、官は刑部尚書に至る。画は山水・墨竹画に優れ、米芾、米友仁、董源、巨然を学んだ。『王鐸年譜長編』によれば、順治三年（一六四六）正月十三日同日、張文光と共に

に弟の鏞が所蔵する高克恭「雲横秀嶺図」を鑑賞し、跋を記した。安岐『墨緣匯觀』卷三「高克恭雲横秀嶺図」に、王鐸が鑑賞した際に記した跋文が見え、「高尚書暈神氣淋漓、岷峨滋長、展日造化從毫、天地無功。丙戌正月十三日、同沐梁張雲齋憲副觀于燕山。王鐸」という。「高彥敬畫」は、高克恭「雲横秀嶺図」である。

高尚 志を高潔に保つ。「易」蠱：「不事王侯、高尚其事。」高亨の注に「下事字、偽孟子外書文說篇引作志、必有所據、當從之……意謂夷齊不為周臣、高尚其志、而得凶禍、餓死於首陽山。」

神氣 精神。「禮記」孔子閑居：「地載神氣、神氣風霆、風霆流形、庶物露生、無非教也。」孔穎達の疏に「神氣、謂神妙之氣。」とある。

淋漓 十分である。馬榮祖「文頌」：「濡梁淋漓、長天伸紙。」

岷峨 山が高く聳え、険しいさま。

滋養 増大する。「左傳」昭公十年：「義、利之本也。藟利生孽。姑使無藟乎。可以滋長。」

造化 自然界の創造者、自然。「莊子」大宗師：「今一以天地為大鑪、以造化為大冶、惡乎往而不可哉。」

天地 天と地。自然界と社会。「荀子」天論：「星隊木鳴、國人皆寤……是

天地之變、陰陽之化、物之罕至者也。」

無功 功績、功勞が無い。「韓非子」內儲說上：「有過不罪、無功受賞、雖亡不亦可乎。」

22 **跋化度碑** 「王鐸書論評注（二）」第三章三

23 **跋柳書** 「王鐸書論評注（二）」第三章五

24 **跋朱晦翁字卷**

秋岳曹君、以朱紫陽畫卷索予跋。長安中軍馬翫愒、體實壅閉湫底、而爽心不生。紫陽何等人物。其書無有愒心、古質莊矜、有違世孤強之心。審心齋、猶懼獲戾、而以不腆之詞、敢跋紫陽先生乎。

夫紫陽當淳熙時、其學本於李侗、侗本楊時、時本程頤。金人見南使、恆問朱先生、學者宗之、嶽嶽泰岱也。林壘韓侂胄乃齟之、仲鴻昌議汝愚批還。雖曰被召、首載籍記偽學、紫陽亦首焉。在朝董四十六日、竟不大用、慶元庚申、老且死。假如天欲興宋、生紫陽于前、或王旦、或韓琦、或司馬光、

得一人焉。與之同時、協智力輔光亨、宋祚當可再翫。豈至如建炎以後岌岌然、遂至就其國步哉。

至今讀災異恤民封事諸篇、古質莊矜、偶十字露其一斑耳。數百餘年猶足爽心也。秋岳愛藏之。其齋楸之心與予同、如紫陽所謂人有其寶。觀此書、鳳翼不屈雞鶩、真足以困已制回、寧違世孤強而不敢滋長愆心也。

亂後丙戌、又幸得跋先生之字之尾、不然見嶽岱而不知尊且就也、予又獲戾矣。

朱晦翁の字卷に跋す

秋岳曹君、朱紫陽の書卷を以て予に跋を索む。長安中、軍馬翫愒にして、體は實に雍閉湫底にして、而して爽心生ぜず。紫陽は何等なる人物なるや。其の書は愆心有る無く、古質にして莊矜、違世孤強の心有り。心を審らかにし齋し楸なること、猶ほ戾を獲るを懼るるがごとくして、而して不腆の詞を以て、敢て紫陽先生に跋せん乎。

夫れ紫陽は淳熙の時に當たりて、其の學は李侗に本づき、侗は楊時に本づき、時は程頤に本づく。金人は南使に見えて、恆に朱先生を問ひ、學者は之を宗とすること嶽嶽たる泰山也。林栗韓侂胄は乃ち之を齟齬(齒列不正)とするも、(游)仲鴻は昌議し、(趙)汝愚は批還す。召さると曰ふと雖も、首なる哉偽學に籍記せらる、紫陽も亦た首たり焉。在朝董かに四十六日、竟に大用されずして、慶元庚申、老いて且つ死す。假如(もし)天、宋を興さんと欲し、紫陽を前(さき)に生まば、或いは王旦、或いは韓琦、或いは司馬光は、一人を得て焉、之と時を同じくし、智力を協し光亨を輔くれれば、宋祚は當に再び縣(つづ)く可し。豈に建炎以後の岌岌然たるが如くに至りて、遂に其の國歩を就(とど)むに至らん哉。

今、災異・恤民の封事諸篇を讀むに至りて、古質莊矜たるは、偶たま字に于いて其の一斑を露はす耳。數百餘年なるも猶ほ爽心に足る也。秋岳は之を愛藏す。其の齋楸の心は予と同じくし、紫陽の所謂「人ごとに其の寶を有す」が如し。此の書を觀るに、鳳翼は雞鶩に屈せず、真に以て己を聞(しず)かにして回(よこしま)を制するに足り、寧(むし)ろ違世孤強にして而して敢て愆心を滋長せざらん也。

亂後の丙戌、又た幸に先生の字の尾に跋するを得たり、然らずんば嶽岱を見て而して尊びて且つ就くを知らざる也、予又た戾(つみ)を獲ん矣。

曹溶が朱熹の書卷を呈示してその跋文を私に求めた。北京では(亂後)兵馬は手持ち無沙汰であり、私の体は実に血気が塞がり体を損ね、気分が晴れない。朱熹はどのような人物であるのか。その書には怠慢さはなく、古風質樸で嚴肅、世間から独立した孤高の信念がある。私は(朱熹先生の書を前にして)心を明らかにして慎み、自然な状態にすること、罪を得ることを恐怖するかのようであり、浅薄な言葉では、あえて朱熹先生の書に跋を認められようか。

そもそも、朱熹は淳熙年間にあつて、学問は李侗を基盤としており、その李侗は楊時を基盤とし、楊時は程頤を基盤としていた。金朝の人が南宋の使者と面会すると、必ず朱熹について質問し、学ぶ者が朱熹を規範とすることは、屹立する泰山に対するようである。林栗や韓侂胄はなんと朱熹を不正な人物としたが、游仲鴻は盛んに朱熹の免職を批判し、趙汝愚は寧宗皇帝の出した朱熹罷免の内批を皇帝に突き返した。趙汝愚は寧宗帝の功により宰相として召されたとは言え、偽字逆党籍の筆頭に記され、朱熹も待制已上十三人の筆頭だった。朝廷への出仕は僅か四十六日、とうとう

重用されないまま、慶元六年（一一〇〇）に老衰のため死去した。もし天が宋を再興しようとし、朱熹を北宋時代に誕生させれば、あるいは王旦、あるいは韓琦、あるいは司馬光は、朱熹という人材を得て、彼と同じ時代に生き、知力を合わせて王朝の榮華を補佐したならば、宋王朝は間違いないく再び続くことができた。どうして南宋・建炎年間以後のような危機的状況に見舞われ、最後には国家の歩みを止めることになるのか。

今、災異（天災地異・恤民（民を苦しみを憂う））に関する朱熹の封事諸篇を読むことになったが、その書風が古風質樸にして嚴肅であるのは、偶然にもその字に朱熹の本質の一部が現れているのである。数百年余りが経過しても心を爽やかにするのに十分である。曹溶はこの朱熹の書を愛感している。彼の慎み深く自然な状態の心は私と同じであり、朱熹の言っていたわゆる「人それぞれ自分の宝とするものを持つ」のようなものである。この書を見るに、鳳凰の翼は野鴨に屈することないように、（朱熹の優れた本質が字にも現れており、）この書を見ることで心を落ち着け邪念を回避するのに足る。むしろ朱熹のように世間から独立した孤高の信念を抱かせ、あえて怠慢な気持ちを増大させることはないものである。

明清交替の戦乱後の順治三年（一六四六）、幸運にも朱熹の書の巻尾に跋を書く機会を得た。そうでなければ、屹立する泰山を見ても尊び近づく事を知らず、重ねて罪を得てしまふところだった。

注

跋朱晦翁字卷 本跋文は順治三年（一六四六）に書かれた跋文。朱晦翁は、南宋の朱熹のこと。朱熹、字は元晦、仲晦、号は紫陽、晦庵、諡は文公、婺源の人。北宋の周敦頤らの思想を継承発展させた朱子学を完成させる。

彼の著に『四書集注』『近思錄』『晦庵先生朱文公文集』等がある。

秋岳曹 曹溶、字は潔躬、号は秋嶽。浙江嘉興の人。崇禎十年（一六三七）の進士。『清史列伝』巻七十八に記載がある。

軍馬 兵馬。『史記』大宛列傳…「及上官桀敢深入、李哆為謀計、軍入玉門者萬余人、軍馬千餘匹。」

翫 無駄に日々を過ごす。出典は、『左傳』昭公元年…「主民、翫威而愒日、其與幾何。」

壅閉湫底 壅閉は、塞ぐ。湫底は、滞る。『左傳』昭公元年…「勿使有所壅閉湫底、以露其體。」孔穎達の疏に「壅、謂障而不使行、若土壅水也。閉、謂塞而不得出、若閉門戶也。」とあり、杜預の注に「湫、集也。底、滯也。」

露 羸也。壹之則血氣集滯而體羸露。」とある。

何等 どのような。

惛心 心身とも怠ける。『禮記』樂記…「君子之近琴瑟以儀節也、非以惛心也。」

古質 古風で素朴。唐段成式『西陽雜俎』寺塔記下…「佛殿内西座、番神甚古質。」

莊矜 嚴肅。『荀子』非相…「談說之術、矜莊以蒞之、端誠以處之。」

違世 世間から離れる。『子華子』神氣…「吾聞之、太上違世、其次違地、其次違人。」

齋 齋戒。潔齋。心身を清めること。

樛 樛樛のこと。平凡。唐・杜牧「賀平党項表」…「臣僻左小郡、樛樛散材、空過流年、徒生聖代。」

獲戾 罪を得る。『書』湯誥…「茲朕未知獲戾于上下。」孔傳に「此伐桀未知得罪於天地、謙以求衆心。」とある。

不腆 浅薄。『魏書』桓玄傳…「豎子桓玄、故大司馬不腆之息、少懷狡惡、長而不悛。」

李侗 李侗(元祐八年(一〇九三)~隆興元年(一一六三))南宋の儒学者。

字は愿中、号は延平。諡は文靖。南劍州劍浦の人。十四歳の時に、同郡の羅從彦が宋学の大家の楊時より二程(程顥・程頤)の学を承けたと聞いて弟子となる。李侗は朱熹の師にあたる。

楊時 北宋の儒学者。字は中立、号は龜山。南劍州将楽の人。官は竜図閣直学士に至る。初め程頤に師事し、彼の死後は弟の程頤に師事した。著に『龜山語録』『龜山文集』がある。

程頤 北宋の儒学者。字は正叔。号は伊川。洛陽の人。兄の程顥と共に二程子と称され、性理学の基礎を築く。弟子楊時の門下李侗から朱熹が出た。著に「伊川先生文集」がある。

間朱先生 『朱子語類』卷第一百六・朱子三・外任・漳州「過甲寅年見先生、間朋輩説、昨歲虜人問使人云「南朝朱先生出處如何」對以「本朝見擢用」。既歸、即曰堂、所以得帥長沙之命。」

嶽嶽 真つ直ぐに聳え立つさま。『楚辭』九思憫上…「叢林兮嶮嶮、株榛兮岳岳。」王逸の注に「岳岳、衆木植也。」とある。

泰岳 泰山。

林巢 林栗は、南宋の政治家。字は黃中、また寬夫。福州福清の人。紹興十二年の進士。朱熹とは同時代であるが、学術的な観点で異なるところがある。

韓侂胄 南宋の政治家。字は節夫。安陽の人。北宋の名臣韓琦の曾孫。母は高宗の皇后呉氏の妹、妻は呉皇后の姪、父の蔭により仕官。紹興五年(一一九四)、光宗が病で孝宗の喪礼を行えなかった為に、趙汝愚らが光宗を退

位させ、皇子の抃(寧宗)を即位させようとした際、韓侂胄に憲聖太皇(呉皇后)の承諾を取らせ、寧宗が即位した。しかし、趙汝愚からの見返りも無く、更に朱熹らが韓侂胄を弾劾した為に、韓侂胄は讒言で趙汝愚を追放した上に、朱熹らを偽学の徒として追放した。

仲鴻 南宋の政治家。游仲鴻、字は子正、順慶府岳池の人。淳熙二年の進士。初任は犍為県主簿。慶元元年(一一九五)趙汝愚が罷免され、游仲鴻は軍器監主簿に任ぜられた。

汝愚 南宋前期の宗室。趙汝愚、字は子直。饒州余乾の人。南宋の宰相であつたが、韓侂胄の讒言で罷免され、觀文殿大学士となり、福州に流され失脚する。さらに「唱引偽徒、謀為不軌」の名で、寧遠軍節度副使として流謫され、永州に追いやられる。

汝愚批還 『宋史』卷三百九十二・列伝第五百一「趙汝愚」に、「右正言黃度欲論侂胄、謀泄、以內批斥去。熹因講華、奏疏極言、陛下即位未能旬月、而進退宰執、移易臺諫、皆出陛下之獨斷、大臣不與謀、給舍不及議。此弊不革、臣恐名為獨斷、而主威不免於下移。疏入、遽出內批、除熹宮觀。汝愚袖批還上、且諫且拜、侂胄必欲出之、汝愚退求去、不許。吏部侍郎彭龜年力陳侂胄竊弄威福、為中外所附、不去必貽患、又奏、近日逐朱熹大暴、故欲陛下亦亟去此小人。既而內批龜年與郡、侂胄勢益張。」とある。

偽學 慶元の党禁。南宋・慶元年間、韓侂胄が趙汝愚を讒言して追放し、更に朱熹らが奉じる程氏の学を偽学として、官途に就くことを禁じ、多くの士を罪に問い、弾圧した事件。

籍記 名前をリストの上に記す。宋陸游『老學庵筆記』卷九…「晁氏世居都下昭德坊、其家以元祐黨人及元符上書籍記、不許入國門者數人、以道其一也。」

大用 重く任用する。『史記』孔子世家：「母求將行、孔子曰：『魯人召求、非小用之、將大用之也。』」

王旦 北宋の政治家。字は子明、大名府莘県の人。太平興国五年（九八〇）の進士。真宗の時に、宰相となる。

韓琦 北宋の政治家。字は稚圭。安陽の人。仁宗・英宗・神宗の三代に仕える。范仲淹とともに韓范と並称された。

司馬光 北宋の政治家。字は君実。涑水の人。神宗の時、王安石の新法に反対して辞職。後に『資治通鑑』を編纂する。神宗没後に宰相となり、旧法の復活に尽力した。

智力 才知と勇力。『管子』形勢解：「能自去而因天下之智力起、則身逸而福多。」

光亨 光り輝く。栄華。南朝宋謝莊「求賢表」：「今大道光亨、萬務俟徳」
岌岌 危ないさま。危機的狀況。『孟子』万章上：「天下殆哉、岌岌乎。」

耽耽 耽る。『玉篇』：「俗耽字。」

國歩 国家の命運。『詩』大雅桑柔：「於乎有哀、國歩斯頻。」毛傳に「歩、行、頻、急也。」とあり、高亨の注に「國歩、猶國運。」とある。

災異 天災地異。『漢書』宣帝紀：「蓋災異者、天地之戒也。」
恤民 民の苦しみを憂慮する。『左傳』襄公二十六年：「古之治民者、勸賞而畏刑、恤民不倦。」

封事 内容の漏洩を防ぐために密封された上奏文書。『漢書』宣帝紀：「上始親政事、又思報大將軍功德、乃復使樂平侯山領尚書事、而令羣臣得奏封事、以知下情。」朱熹『朱文公文集』卷十一・卷十二に「封事」七篇を収める。

一斑 一部分。南朝宋劉義慶『世說新語』方正：「王子敬數歲時、嘗看諸

門生榜浦。見有勝負、因曰、南風不競、門生輩輕其小兒、迺曰、此郎亦管中窺豹、時見一斑。子敬瞋目曰、遠慚荀奉倩、近愧劉真長、遂拂衣而去。」

人有其寶 『左傳』襄公十五年、「宋人或得玉、獻諸子罕、子罕弗受、獻玉者曰、以示玉人、玉人以為寶也、故敢獻之、子罕曰、我以不貪為寶爾、以玉為寶、若以與我、皆喪寶也、不若人有其寶、稽首而告曰、小人懷璧、不可以越鄉、納此以請死也、子罕寘諸其里、使玉人為之攻之、富而後使復其所。」『晦庵先生朱文公文集』卷二十九・与留丞相書に、「若又能容熹、使不自失其所守、則是古人所謂人有其寶者、亦何必使之回回汚行而為終身之羞哉。」紹熙四年（一一九三）十二月、朱熹六十四歳の時に、潭州知事に赴任の命が下った。この手紙は左丞相の留正に辞退を訴えたもの。

鳳翼 帝王、権力者、珍しい吉兆の喩え。漢・揚雄『法言』淵騫：「攀龍鱗、附鳳翼。」

雞鷲 野鴨。小人。『楚辭』屈原・卜居：「寧與黃鵠比翼乎。將與雞鷲爭食乎。」

足以 十分にできる。『孟子』梁惠王上：「吾力足以舉百鈞、而不足以舉一羽。」

滋長 増大する。『左傳』昭公十年：「義、利之本也。蘊利生孽。姑使無蘊乎。可以滋長。」

25 跋淳化帖 「王鐸書論詠注（二）」第二章一〇

26 劉松年瀟湘圖

松年畫八景相鱗次、每一幅作二景、連綴四時、氣候澹漠、確然不為一狀、晴晦隱約、愈蒼愈深、謂之曰老瀘、其為蒼梧洞庭寫照者乎。

予恨未游、晴窓香清、時披矚焉、山翠流雲、蒲帆雪氣、地天伸縮、林壑鼓舞、俱落吾枕席間、隨手動盪也。孰使我忘榮、進醉烟波、姚佚變態、不知瀟湘之遠江南數千里、非松年移以就我耶。又孰知瀟湘之在天地、與天地之生瀟湘、生于毫楮、有以異無以異哉。

二弟四時收于一晷、微松年、蒼梧洞庭反為死物、滯于一隅烟波。烟波其則不遠、今而後、予不以未游為恨矣。二弟鏞其亦攜之、而有所忘歟。囊中峰巒、夜中必有灌泝之聲。

劉松年瀟湘圖

松年は八景を畫きて相ひ鱗次せしめ、一幅毎(ごと)に二景を作り、四時を連綴し、氣候澹漠たりて、確然たるは一狀を為さず、晴晦隱約にして、愈いよ蒼にして愈いよ深く、之を謂ひて老瀘と曰ふ、其れ蒼梧洞庭の寫照を為す者乎。

予恨むらくは未だ遊ばざるを、晴窓香清、時に焉れを披矚するに、山翠流雲、蒲帆雪氣、地天伸縮、林壑鼓舞、俱に吾が枕席の間に落ち、手に隨ひて動盪する也。孰れか我をして忘榮し、醉を烟波に進め、姚佚し變態し、瀟湘の江南に遠きこと數千里なるを知らざらしめん、松年の移して以て我に就くに非ず耶。又た孰れか知らん瀟湘の天地に在るは、天地の瀟湘を生み、毫楮に生むと、以て異なる有るや以て異なる無き哉。

二弟は四時を一晷に收むるに、松年微(な)くんば、蒼梧洞庭は反つて死物と為り、一隅の烟波に滯(とど)こほらん。烟波は「其の則(のり)遠からず」、今而後、予は未だ遊ばざるを以て恨みと為さず矣。二弟鏞よ其(あ)に亦た之を攜へ、而して忘るる所有る歟。囊中の峰巒、夜中に必ず灌泝の聲有らん。

劉松年は瀟湘八景を描くに、連続させて、一幅ごとに二景を作り、春夏秋冬の順に配置した。描かれた天候はいずれも穏やかで空漠としているが、石にぶつかり流れる水音はそれぞれ一様ではなく、晴れ曇りがはつきりせず、古めかしさが増すにつれて奥深い内面性が現れ、このことを「老瀘(老いていよいよ深し)」といい、この画はまさしく蒼梧、洞庭地域の生き写しであろうか。

私は未だ瀟湘の地に行つたことがないのを恨めしく感じている。晴れた日に窓辺で爽やかな香を焚き、時にこの画卷を開いてみる。青緑の山に雲が流れ、帆掛船に雪の寒気、画卷の中で現実の天地は拡大され縮小され、樹林と山谷は躍動し、全て我が寢室へと入りこみ、私の手に従つて揺れ動くのである。誰が私に世俗の榮辱を忘れさせ、霧の立ち込める湖水の中で酔いを進めさせ、軽はずみであつたり勝手気ままであつたり、自在に変化したりさせ、瀟湘が江南から數千里も離れていることを忘れさせたのか。劉松年が瀟湘の地を移動させて、私のところを持つてきたということではないのか。さらに、天地の間に瀟湘があることは、天地が瀟湘を生み出し、画家によつて瀟湘八景が生み出されたことと、異なる点があるのか異なる点がないのかを誰が知ろう。

我が弟である王鏞は劉松年「瀟湘図」を所蔵することで、四季を一瞬の

うちに体験することができるようになり、劉松年がいなければ（劉松年によって瀟湘八景が描かれなければ）、蒼梧、洞庭はかえって死物となり、天下の隅っこの霧の立ち込める湖水であることに止まっていたであろう。『詩経』「幽風・伐柯に「其の則遠からず」（手本は身近にある）」と言う（ように、霧の立ち込める優れた山水の見本はまさしく劉松年のこの画中にある）。今後、私は瀟湘を訪れていないことを恨めしく思わない。王鏞よ、どうして劉松年「瀟湘図」を携えていながら、それを忘れてしまうなんてことがあ
るものか。袋の中に収めた劉松年画中の連峰から、夜にはきつと波の音が響くであろうから。

注

劉松年瀟湘圖 本跋文は、『王鐸年譜長編』によれば、崇禎十六年（一六四三）、二弟の鏞の為に書いた跋。また、跋文中の「不知瀟湘之遠江南數千里」より、本跋文は江南滞在時に書かれたものである。この時、王鐸は弟の鏞と避難して呉門（蘇州）にいたという。劉松年は南宋の画家、錢塘の人。劉松年、李唐、馬遠、夏圭らは、南宋四家と併称された。また、清波門（俗称暗門）に住んでいたことから、暗門劉とも称された。瀟湘は、中国絵画の画題の瀟湘八景のこと。瀟湘は湖南省洞庭湖南、瀟水、湘水の合流する景勝地である。瀟湘八景は、その一帯から八つの地を選んだものであり、山市晴嵐、漁村夕照、遠浦帰帆、瀟湘夜雨、煙寺晚鐘、洞庭秋月、平沙落雁、江天暮雪を指す。

鱗次 鱗のように並び続くさま。鮑照「詠史」…「京城十二衢 飛夢合鱗次」

連綴 連なり続く。『後漢書』董卓傳…「自東澗兵相連綴四十里中、方得至陝、乃結營自守。」

四時 四季。『禮記』孔子閑居…「天有四時、春夏秋冬夏。」

氣候 天氣。南朝・宋・謝惠連「石壁精捨還湖中」詩…「昏旦變氣候、山水含清暉。」

澹漠 淡白で物静か。『莊子』繕性…「古之人在混茫之中、與一世而得澹漠焉。」

硃肤 水が激しく石を打つ音。唐柳宗元「霹靂琴贊引」…「一夕暴震、為火之焚、至且乃已。其餘硃然倒臥道中。」

一狀 形状。『列子』黃帝…「夏桀、殷紂、魯桓、楚穆、狀貌七竅、皆同於人、而有禽獸之心。而衆人守一狀以求至智、未可幾也。」

晴晦 晴れと曇り。

隱約 はっきりしていないさま。南朝・梁・何遜「初發新林」詩…「帝城猶隱約、家國無處所。」

愈蒼愈深、謂之曰老沍 明・陸西星・南華副墨「此等機心、愈老愈深。故曰老沍。」

老沍 『莊子』内篇・齊物論「其厭也如緘、以言其老沍也（其の厭（ふさ）がること緘の如しとは、以て其の老沍たるを言うなり）」郭象の注に、「壓緘、厭没于欲。老沍、老而愈沍也。」とある。ここでは、老熟を意味するか、

蒼梧、洞庭 秦の統一以前、楚には洞庭、蒼梧の二郡があった。

寫照 人の肖像を描く。南朝・宋・劉義慶『世說新語』巧藝…「顧長康畫人、或數年不點。人間其故、顧曰、四體妍蚩、本無關於處、傳神寫照、正在阿堵中。」

晴窓 明るい窓。唐・杜牧「閨情」詩…「暗砌勻檀粉、晴窗畫夾衣。」

山翠 青緑色の山。南朝・梁・庾肩吾「奉和春夜應令」…「水光懸蕩壁、山翠下添流。」

流雲

蒲帆 蒲筵の帆。唐李賀「江南弄」詩：「水風浦雲生老竹、渚暝蒲帆如一幅。」

雪氣 白い雲霧。唐朱慶餘「與賈島顧非熊無可上人宿萬年姚少府宅」詩：「堂虛雪氣入、燈在漏聲殘。」

林壑 樹林と山谷。謝靈運「石壁精捨還湖中作」：「出谷日尚早、入舟陽已微。林壑斂暝色、雲霞收夕霏。」

枕席 寢床。『禮記』喪大記：「含一牀、襲一牀、遷屍於堂又一牀、皆有枕席。」

動盪 揺れ動く。『中記』樂書論：「故音樂者、所以動湯血脈、通流精神而和正心也。」

忘榮 世間の人を軽視する。晉成公綏「嘯賦」：「逸羣公子、體奇好異、傲世忘榮、絶棄人事。」

姚佚 軽はずみで気ままなさま。『莊子』齊物論：「喜怒哀樂、慮嘆變愁、姚佚啓態。」

毫楮 筆と紙。宋蘇軾「書鄆陵王主簿所書折枝」詩之二：「若人富天巧、春色入毫楮。」

一晷 一時。唐吳融「祝風三十二韻」：「秋不安一食、春不閒一晷。」

其則不遠 『詩經』邠風・伐柯：「伐柯伐柯、其則不遠」これは、よい手本となるものは身近にあるものだ、という意。

濯泚 象声詞。『文選』木華「海賦」：「濯泚澗澗、蕩雲沃日。」李善の注に、「衆波之聲。」とある。

27 跋米海嶽山水圖

米畫多用雲氣掩映、不以山體見外。予嘗棲深山中、山之磧路土竇、複澗凹險、立山之麓不及知、徐入于内、登于上始知之。

二弟仲和所藏海嶽大幅、大略寫吳越山貌、此山遂不屬之造化、屬之吾東、為弟有山遇知矣。玩此而凌坻崩岨、與龍渦相涵演、其峻極者纔三四峰耳、

其中複者凹者、連岫畏佳者、皆不可見。山之德不事表襮、以求人知、如斯二弟雖仕于外、恆與予言、選山之*從、兄弟以耕漁老、其不欲外見、得無有相肖者耶。

噫、廊廟事業、不遇時多掩蔽、何異雲霧之蔽也。故有時不肯以樵唱牧歌、巖華溪鳥、易廊廟事業者、古人往往有之、豈無所見歟。内外明晦、出處之微、即海嶽一畫而道存也。但以畫視畫、惡足以知之。

*…山十糸十

米海岳の山水圖に跋す

米畫は雲氣の掩映するを多用し、山體を以て外に見(あらは)さず。予は嘗て深山中に棲むに、山の磧路土竇(あな)、複澗(たにがわ)凹險、山の麓に立たば知るに及ばざるも、徐(おもむ)ろに内に入りて、上に登りて始めて之を知る。

二弟仲和の藏する所の海嶽の大幅は、大略吳越の山貌を寫す、此の山は遂に之を造化に屬せしめず、之を吾弟に屬せしめ、弟の山の遇知するを有するところと為れり矣。此れを玩ぶに凌坻崩岨と、龍渦の相涵演せると、其の峻極なる者は纔(わずか)に三四峰耳、其の中の複せる者凹なる者、連なる岫、畏佳なる者、皆な見る可からず。山の德は表襮に事へず、以て人の知るを求む、斯の如く、二弟の外に仕ふと雖も、恆に予の與(ため)に

「山の*姿を選びて、兄弟して耕漁を以て老ひん」と言ふ、其れ外見するを欲せざらんは、相肖(に)る者有る無きを得ん耶。

噫(ああ)、廊廟の事業は、不遇の時は多く掩翳せられ、何ぞ雲霧の蔽ふに異ならん也。故に時に肯て巖華溪鳥を樵唱牧歌するを以て、廊廟の事業に易(か)へざる者(こと)、古人往往にして之有りて、豈に見る所無からん歟。内外明晦、出處の微は、即へ海獄の一畫なるも道は存する也。但だ畫を以て畫を視るは、惡(いづくん)ぞ以て之を知るに足らんや。

米芾の画は、雲気によって山の姿が見え隠れする手法を多用し、山の姿を外に現していない。以前、私は奥深い山中に住んでいたが、山の砂利道や土の穴、幾重にも重なる溪谷の凸凹は、山麓に立つと知ることができなかったが、ゆつくりと山中に入り、山上に登るとようやく知ることができた。

二弟仲和所蔵の米芾の大幅は、概ね吳越(杭州)の山の姿を描写している。この山は結局自然界の創造主には属さず、画になったことで我が弟の所有物となり、我が弟によって高く評価すべき山は所持されることになった。この画を鑑賞するに、聳え立つ山の斜面・巨大な岩山と、滝壺に流れる滝など、険峻を極めた地形は、僅か三、四峰だけである。画中の山の重なつたところ、窪んだところ、連なる峰の尾根がうねうねと廻っている所は、全て見ることができない。山の徳はひけらかすものではなく、人から知られることを求めるものである。このように、二弟は宮仕えしているが、常に私の為に「山の高い峰を選んで、兄弟で農業や漁業を営んで歳を重ねよう」と言ったが、この世間に出たくはないと言うのは、この米芾画と似通う所があるのではないか。

ああ、朝廷での仕事は、不遇の時は真価が覆い隠され、山が雲霧に覆われるのと何ら変わらないのではないか。それ故、時にあえて山中の華、谷川の鳥を木こり歌、牧童歌として歌うことで、朝廷への出仕に代えない事例は、古人についてもしばしばあったことは、全く見られないことがあるうか。朝廷と在野、出世と雲落という出処進退の機微は、たとえ米芾の一面であっても、そこに道理が存在している。絵画について、絵画の側面だけを見て、その寓意について見ないことは、どうして画を知るに十分といえよう。

注

跋米海岳山水圖 『王鐸年譜長編』によれば、本跋文は順治三年(一六四六)に書かれた跋文であるという。

雲氣 空高く立ち込める雲や霧の氣。『管子』水地：「龍生於水……欲尚則凌於雲氣、欲下則入於深泉。」

掩映 隠れたり現れたり。唐元稹「賽神」：「採薪持斧者、棄斧縱橫奔。山深多掩映、僅免鯨鯢吞。」

深山 人里から離れた奥深い所にある山。『左傳』襄公二十一年：「深山大澤實生龍蛇。」

磧路 砂や小石の多い道。南朝・宋・鮑照「登翻車峴」詩：「淖阪既馬領、磧路又羊腸。」

大略 おおよそ。『孟子』滕文公上：「此其大略也、若夫潤澤之、則在君與子矣。」趙岐の注に「略、要也。」とある。

造化 自然界の創造主。『莊子』大宗師：「今一以天地為大鑪、以造化為大冶、惡乎往而不可哉。」

遇知 評価を受ける。唐韓愈「與汝州盧郎中論薦侯喜狀」：「子之遇知於盧公、真所謂知己者也。」

坻 山坡。

崩 大きな。『集韻』：「寔側切、坎宜崩。崩、山大貌。」

咀 土を被った石山。

龍瀆 滝壺。唐岑參「赴犍為經龍閣道」：「汗流出鳥道、膽碎窺龍瀆。」

涵演 水流の様。南朝梁江淹「學梁王兔園賦」：「於是金塘涵演、綠竹被阪。」

峻極 極めて高い。『禮記』中庸：「發育萬物、峻極於天。」鄭玄の注に「峻高也。」とあり、孔穎達の疏に「言聖人之道高大、與山相似、上極於天」とある。

畏佳 山の尾根がうねうねと廻っている所。『莊子』齊物論「山林之畏佳、大木百圍之竅穴、似鼻、似口、似耳、似枅、似圈、似臼、似窪者、似汚者、」
表襮 ひげらかす。唐韓愈「南海神廟碑」：「治人以明、事神以誠、内外單盡、不為表襮。」

耕漁 耕種と漁獲。『呂氏春秋』慎人：「舜之耕漁、其賢不肖與為天子同。」
外見 外に現れる。『宋書』隱逸傳序：「夫隱之為言、跡不外見、道不可知之謂也。」

廊廟 朝廷。『國語』越語下：「謀之廊廟、失之中原、其可乎、王姑勿許也。」

掩翳 遮蔽。晉葛洪「抱樸子」論仙：「安得掩翳聰明、歷藏數息、長齋久

潔、躬親爐火、夙興夜寐、以飛八石哉。」

樵唱 木こりの歌う歌。唐祖詠「汝墳別業」詩：「山中無外事、樵唱有時

聞。」

牧歌 牧童や牧人が歌う歌。唐元結「五規」戲規：「元子反倚於雲丘之顛

戲牧兒曰、爾為牧歌、當不責爾暴。」

内外 内側と外側。『國語』楚語上：「夫美也者、上下、内外、小大、遠近

皆無害焉、故曰美。」

明晦 明暗。南朝梁武帝「擬明月照高樓」詩：「相去既路迴、明晦亦殊懸。」

出處 出仕と隱居。漢蔡邕「薦皇甫規表」：「修身力行、忠亮闡著、出處抱義、皦然不汚。」

28 題黃子久平遠山水卷

黃公望、號一峰、常熟人。畫多做新城富陽蘭溪山意、先師董源、後稍變之。

茲卷後有內閣范質公、奉常孫北海二印。山不用奇峭懸崖、查鑿之狀、淡

遠潤滋、沈着逸宕、畫之逸氣取勝、冲然不用雕刻、殆庶于理矣。不得此意、
穠稠與枯弱無異、其渾成穆穆之味喪矣。不然法書名畫無理存焉。徒競多角
艷、畫亦何益哉。

黃子久の平遠山水卷に題す

黃公望、號は一峰、常熟の人。畫は多く新城・富陽・蘭溪の山意に倣ひ、
先に董源を師とし、後に稍（やや）之を變ず。

茲卷は後に内閣范質公、奉常孫北海の二印有り。山は奇峭懸崖、杳翳の
状を用ゐず、淡遠潤滋、沈着逸宕にして、畫の逸氣は勝を取る、冲然とし
て雕刻を用ゐず、殆んど理に庶（ちか）し矣。此の意を得ずんば、穠稠と
枯弱とは異なること無く、其の渾成穆穆の味は喪（うしな）はる矣。然ら
ずんば法書・名畫は理の存する無し焉。徒らに角艷多きを競ふは、畫に亦
た何の益かあらん哉。

黃公望、号は一峰、常熟の人。黃公望の画は多く江南の新城・富陽・蘭
溪の山の意（情趣）を模倣しており、初めに董源を学び、後に次第に変化
した。

この画の卷末には、范景文、孫承沢二人の印がある。画中の山は断崖絶
壁で、岩山が重なり合う表現は用いておらず、遠景は淡く潤いがあり、着
実でありながら超越的で拘束がなく、画の逸氣（非凡な氣）が優っており、
衝動的で彫琢を凝らしてはおらず、ほとんど理（天理）に近い。この意（情
趣）を得なければ、細密に描かれた部分と粗放に描かれた部分とは差がな
くなり、一体感のある優れた興趣は失われてしまう。そうでなければ、法
帖や名画には理（天理）が存在しないものとなってしまふ。無駄に鋭角や
美しさが多いのを競うことは、絵画にとってどんな利益があるうか。

注

題黃子久平遠山水卷 黃公望は、元代の文人画家。字は子久。号は、一峯、
大痴。常熟の人。董源、巨然の画法を元として独自の山水画様式を確立。
元末四大家の一人。

平遠 宋・郭熙『林泉高致』山水訓「山有三遠。自山下而仰山顛、謂之高
遠。自山前而窺山後、謂之深遠。自近山而望遠山、謂之平遠。」

新城 浙江省杭州市に嘗て存在した県。今の富陽区新登鎮に相当。

富陽 浙江省杭州市に位置する市轄区。

蘭溪 浙江省金華市に位置する県級市。

山意 山の表情、態度。唐杜甫「小至」詩「岸容待臘將舒柳、山意衝寒
欲放梅。」

董源 字は叔達。鍾陵の人。巨然とともに南唐・北宋初期を代表する山水

画家。画風は弟子巨然に受け継がれる。北宋の米芾が董源、巨然を称賛し、後に元末四大家の学ぶところとなった。

内閣范質公 范景文。字は夢章、号は質公、思仁。河北吳橋の人。万曆四

十一年（一六一三）の進士。官は兵部尚書、東閣大學士に至る。

奉常孫北海 孫承澤のこと。

奇峭 山が険しく聳え立っていること。宋周密『癸辛雜識後集』游園古泉：

「山頂更覺奇峭、必有可喜可噩者、以足德、不果往。」

懸崖 絶壁。南朝 宋 鮑照「岐陽守風」詩：「廣岸屯宿陰、懸崖棲歸月。」

杳巖 岩山が重なり合い翳る。庾肅之「山贊」：「懸石杳巖。」

淡遠 淡白で高遠。

潤滋 滋潤。潤いがある。唐 韋應物「秋集寵還途中作謹獻壽春八公黎公」詩：

「山川降嘉歲、草木蒙潤滋。」

沈著 沈着。唐 元稹「法曲」：「明皇度曲多新態、宛轉侵淫易沈著。」

逸宕 超脱していて拘らない。明 楊璉「龍膏記」酬詠：「這詩丰神逸宕、如俊鶴摩霄。」

逸氣 世俗を超脱した風格。北齊 顏之推「顏氏家訓」文章：「凡為文章、

猶人乘驥、雖有逸氣、當以銜勒制之、勿使流亂軌躅、放意填坑岸也。」

王利器の集解に「逸氣、謂俊逸之氣。」とある。

取勝 勝ち取る。制勝。『漢書』趙充國傳：「以逸擊勞、取勝之道也。」

冲然 衝然。突出したさま。唐 韋應物「還闕自述、寄精捨親友」：「休沐日

雲滿、冲然將罷觀。嚴軍候門側、晨起正朝冠。」

雕刻 苦心して文辞を修飾する。唐 杜甫「寄劉峽州伯華使君」詩：「雕刻初

誰料、纖毫欲自矜。」

無翼 違いが無い。相同。『史記』張儀列傳：「夫戰孟賁、烏獲之士以攻不

服之弱國、無翼垂千鈞之重於鳥卵之上、必無幸矣。」

渾成 自然に成る。『抱朴子』内篇 暢玄：「恢恢蕩蕩、與渾成等其自然、浩

浩茫茫、與造化均其符契。」

穆穆 麗しく立派なさま。『書』舜典：「賓於四門、四門穆穆。」

29 跋王若水華鳥圖

作畫最忌院體。便落蹊徑。若水此圖、精神氣力皆足、無院中習氣。若其

精神超邁、有借于畫而溢于畫表、畫實不足以盡之矣。若水王淵字、杭人。

王若水の華鳥圖に跋す

作畫は最も院體を忌む。便ち蹊徑に落つ。若水の此の圖は、精神氣力は

皆な足り、院中の習氣無し。其の精神の超邁なるが若きは、畫に借りて而

して畫表に溢ふること有るも、畫は實に以て之を盡すに足らず矣。若水

は王淵の字、杭人なり。

作画は最も院体画を忌避する。(そうしなければ)狭い道に落ちる。王淵

のこの画は、精神と気力が全て充実しており、院体画の悪習が無い。彼の精神が超越していることに関しては、画を手立てとして思想や感情が画の外に溢れ出している、画は本当に彼の精神を表現し尽くすことに足りない。若水は王淵の字、杭州の人である。

注

跋王若水華鳥圖

王淵は、元代画家。字は若水、号は澹軒、錢塘の人。花鳥、人物、山水画に巧みであった。

院體

院体画。宮廷画院の裝飾的画風による絵画。元 夏文彦『圖繪寶鑑』

宋…張武翼多諒、工道釋人物、其蹟爲畫家檢範、今世稱院體首足也。」

蹊徑

小路。『呂氏春秋』孟冬…「備邊境、完要塞、謹關梁、塞蹊徑。」

習氣

良くない習慣、作風。宋 蘇軾「再和潛師」…「東坡習氣除未盡、時復

長篇書小草。」

超邁

超越。『梁書』武帝紀下…「文質彬彬、超邁今古。」

溢上畫表

思想や感情を紙墨の外に出す。明朱之瑜「答野節書二十八首…

「來札藹藹之情、溢於楮墨之表、彼此同之。」

不足以

十分に重視しない。左丘明「臧僖伯諫觀魚」…「臧僖伯諫曰、凡物

不足以講大事、其材不足以備器用、則君不舉焉、君將納民於軌物者也。」

30 跋范寬山水

中立畫妙在為山水傳神、用老筆、間重墨、石壁鐵色。委婉而毅、如狄梁回唐祚於不墜、陘峴直上、如段秀實笏擊朱泚、山水中有大臣之骨力者、造化不以柔媚示人。中立寫之、饒有筆勇、處浮沈之中、匡羈旅之懷、空負此畫、吾愧中立矣。

范寬の山水に跋す

中立の畫の妙は山水の為に神を傳ふるに在り、老筆を用ひ、重墨を間(まじ)へ、石壁は鐵色なり。委婉にして毅なること狄梁の唐祚を不墜に回するが如し。陘峴直上すること、段秀實の、朱泚を笏撃するが如し、山水中に大臣の骨力有る者は、造化の柔媚を以て人に示さざるなり。中立之れを寫し、饒(おほ)いに筆の勇なる有るも、浮沈の中に處(お)り、羈旅の懷(あつ)き、空しく此の畫に負(そむ)き、吾れ中立に愧つ矣。

范寛の画の妙は山水のためにその実相を伝えることにある。秃筆を使用し、時に墨を塗り重ね、石壁のような岩肌は鉄色である。婉曲でありながら毅然とした表現は、狄仁傑が唐王朝を滅亡から引き戻したかのようである。山谷や連峰が上に真つ直ぐ伸びる様子は、段秀実が笏を振り上げて朱泚の額を打ったかのようである。山水中に大臣の剛直さが表れているのは、創造主が柔和な艶かしさを人に示さないかのである。范寛は山水を描いて、雄壮な筆力に溢れているが、私の人生は浮沈の中にあり帰郷への思いが強い。この画に描かれた骨力に空しく背くことになり、范寛に対して恥ずかし。

注

跋范寛山水 范寛、字は中立、京兆華原の人。北宋の画家。その画風は、北宋末の李唐に受け継がれ、南宋院体画風への素地ともなった。代表作は、「溪山行旅図」。

傳神 実相。(描写が)真に迫る。南朝宋劉義慶『世說新語』巧藝：「顧長康畫人、或數年不點目精。人問其故、顧曰、四體妍蚩、本無關於妙處、傳神寫照、正在阿堵中。」

老筆 熟練の筆法。ここでは、秃筆。唐李白「題上陽台」詩：「山高水長、物象千萬、非有老筆、清壯可窮。」

石壁 石を彫って作成した壁。『管子』輕重丁：「請以令城陰里、使其牆三重而門九襲。因使玉人刻石而爲壁……壁之數已具、管子西見天子、曰、弊邑之君、欲率諸侯而朝先王之廟、觀於周室、請以令使天下諸侯朝先王之廟、觀於周室者、不得以形弓石壁……不以形弓石壁者、不得入朝。天子許之。」

曰、諾。」

鐵色 青黒色。

委婉 事を直接的に述べず、故意に話を含ませ、婉曲的に話す。出典は、『漢書』玄成傳：「即陽為病狂、臥便利。」

狄梁 狄仁傑(六三〇・七〇〇)、唐代則天武后朝の宰相。字は懷英。并州太原の人。高宗・中宗・睿宗・武則天に仕えた。硬骨の人で、武三思の立太子を諫めて断念させ、唐の国祚を守る。景龍四年(七一〇)、睿宗によって梁国公に追封された。

不墜 喪失しない。晋・杜預「春秋左氏傳序」：「西周之美可尋、文武之跡不墜。」

際峴 山谷と連峰。『文選』謝靈運「從斤竹澗越嶺溪行」詩：「透池傍隈隩、迢遞陟際峴。」

如段秀實笏擊朱泚 段秀實は、唐代の軍人。原名は顔。字は成公。隴州汧陽の人。朱泚は、字号不詳、幽州昌平の人。『資治通鑑』卷二百二十八「秀實勃然起、奮袂象笏、前唾泚面、大罵曰、狂賊、吾恨不斬汝萬段、豈從汝反邪。因以笏擊泚、泚舉手扞之、才中其額、濺血灑地。」

柔媚 柔和で艶いたさま。宋蘇洵「詩論」：「吾觀國風婉變柔媚、而卒守以正。」

羈旅 他郷に身を寄せている旅人。『文選』阮籍「詠懷詩一七首之一二」：「羈旅無疇匹、俛仰懷哀傷。」

31 跋高房山畫

高彦敬為刑部尚書、作畫師二米、米師董源。而博大輪囷、自見礪礪、其

法蹙縮深潤、雲不暇山、木不暇根、淺色輕墨、山形有龍攀虎蹲之勢、力與天地爭、正性不屈不辱、可謂得大體矣。

江右羅司業、孫奉常、各有一幅、與二弟合為三。而茲圖更磅礴、其煙嵐水浦、合沓鬱律、不可摧擠而搖奪之。晝日對此畫、長人壯心、堅人疆骨、知畫之大體。彼淺薄陋小者、其領略幾何哉。

高房山の畫に跋す

高彦敬は刑部尚書為(た)りて、作畫は二米を師とし、米は董源を師とす。而して博大輪困にして、自(おのづ)から礪磈を見(あらは)し、其の法は蹙縮にして深潤、雲は山をなすに暇(いとま)あらず、木は根をなすに暇あらず、淺色輕墨にして、山形には龍攀虎蹲の勢有り、力は天地と争ひ、正性は屈せず辱しめられず、大體を得たりと謂ふ可し矣。

江右の羅司業、孫奉常、各おの一幅有り、二弟と合して三と為す。而して茲の圖は更に磅礴、其の煙嵐水浦は、合沓鬱律にして、摧擠するも而るに之れを搖奪すべからず。晝日に此の畫に對すれば、人の壯心を長ぜしめ、人の疆骨を堅くならしめ、畫の大體を知らしむ。彼の淺薄陋小なる者は、其の領略すること幾何(いくばく)ぞ哉。

高克恭は刑部尚書となり、画を描く際には米芾、米友仁を手本とし、米芾は董源を手本とした。高克恭の絵画は、氣宇壮大で雲氣はうねうねと折れ曲がり、その中に山塊が自然とゴツゴツとした姿を表す。画法は皴を重ねて深く潤いがあり、雲を描くも山なす形にはならず、木を描くも根をはった表現にはならない。色は薄く、墨は軽やかである。山の形は龍がのたうち回り、虎が蹲る勢いがあり、山の力は天地と競い、その本来の性質は

屈服せず辱められることなく、彼の絵画は大局的な本質を備えていると言える。

江右の羅司業、孫承澤はそれぞれ一幅を所蔵しており、二弟の鏞の所蔵品と合わせれば三幅となる。しかし、この高房山の画はそれらより更に氣宇壮大であり、画中の霧のかかった山林や水辺は折り重なり屈曲し、松の木は碎かれ押しつぶされてもその勢いを奪われることはない。日中この画に對すれば、人の生き盛んな心を励まし、人の強固な意志をより堅くさせ、画の大局的本質を理解させる。(しかし、) 絵画理解が淺薄である者は、どれほどそれを会得できようか。

注

跋高房山畫 高克恭、字は彦敬、号は房山。中国、元代の画家。仕官して刑部尚書に至る。初め米芾、米友仁、後に李成、董源、巨然を学ぶ。

二米 米芾、米友仁父子のこと。

董源 五代南唐の山水画家。字は叔達。鍾陵の人。南唐の中主李璟に仕え、後苑(北苑)副使となり、宮廷画家として活躍。後世、南宗画の淵源となつた。

博大 広く大きい。『管子』權修：「萬乘之國、兵不可以無主、土地博大、野不可以無吏。」

輪困 うねうねと折れ曲がる。『文選』鄒陽「獄中上書自明」：「蟠木根柢輪困離奇。」李善の注に引く張晏に「輪困離奇、委曲盤戾也。」とある。

礪磈 高さが凹凸。三國・魏・曹植「承露盤銘」：「岩岩承露、峻極太清。神石礪磈、洪基岳峙。」

蹙縮 皺。しわしわ。

龍攀虎踞 陸龜蒙「怪松圖贊(並序)」に、「有道人自天台來、示予怪松圖、披之甚駭人目。根盤於岩穴之內、輪困偏側而上、身大數圍、而高不四五尺、礧礧然、蹙蹙然。幹不暇枝、枝不暇葉、有若龍攀虎踞壯士囚縛之狀。」陸龜蒙「怪松圖贊(並序)」は、天賦の才のあるものが、世の中に受け入れられず、苦悶すること、このような奇怪な姿の松となった。松の姿と才能ある人物の苦悶を重ねて表現したもの。

正性不屈不辱 陸龜蒙「怪松圖贊(並序)」に、「今不幸出於岩穴之内、脛脆者、則磔然之牙伏死其下矣、何自奮之能為。是松也、雖稚氣初拆、而正性不辱。」とある。

大體 概略。大要。『史記』平原君虞卿列傳論…「未睹大體。如、做事要顧大局、識大體。」

羅司業 詳細不明。司業は、国子監の教授。隋の煬帝の時に設置、清代に廃止。

磅礴 氣勢が盛大なこと。晉・陸機「輓歌」之二…「重阜何崔嵬、玄廬竄其間。磅礴立四極、穹崇效蒼天。」

煙嵐 「煙嵐」とも書く。山林間に立ち上る霧。唐宋之間「江亭晚望」詩…「浩渺浸雲根、煙嵐出遠村。」

合沓 折重なる。漢賈誼「旱雲賦」…「遂積聚而合沓兮、相紛薄而慷慨。」

鬱律 『文選』張衡・西京賦「於前則終南太一、隆崛崔嵬、隱鱗鬱律、連岡乎嶠冢。」呂延濟注「崔萃、隱鱗、鬱律、皆險曲貌。」

摧擠 退けて折る。『楚辭』王逸九思憫上「魁壘擠摧兮常困辱、含憂強老

兮愁不樂。」原注に「擠摧、折屈也。」とある。また、陸龜蒙「怪松圖贊(並序)」に、「天之賦才之盛者、蚤不得用於世、則伏而不舒。薰蒸沉酣、日進其道。摧擠勢奪、卒不勝其阨。」とある。

壯心 偉大な志。漢・焦贛『易林』井之大過…「鐘鼓夜鳴、將軍壯心、趙國雄勇、鬪死滎陽。」

疆 強。『集韻』…「或作疆。」

淺薄 学識が浅い。『漢書』公孫弘傳…「愚臣淺薄、安敢比材於周公。」

陘小 卑しい。『漢書』食貨志上…「莽一朝有之、其心意未滿、陘小漢家制

度、以爲疏闊。」

領略 理解。心得する。南朝梁江淹「雜體詩效張綽雜述」…「領略歸一致

南山有綺皓。」

32 跋元二鶴

程玉潤 吳興人、善作鳥。此幅寫于大竹下、一簞肩、一梳翎、雪羽霜衣、

得蒼負之陰、優遊閒適、無樊籠之憂、良足怡也。

彼易凌霄之姿、徒為人耳目玩者、六翮恐摧、雙心伏怨、嘖、物有本性、

養文重毅、可以徒參虛*乎哉。在林之鶴、宜何處乎。

*..執十糸。「繫」の異体字と判断し解釈。

元人の二鶴に跋す

程玉潤は、吳興の人、善く鳥を作る。此の幅は、大竹の下に于ける、一

つは肩を聳(そびやか)し、一つは翎を梳(くしけず)るを寫す。雪羽霜

衣なるが、蒼負の陰を得、優遊閒適なるは、樊籠の憂ひ無く、良(まこと)

に怡(よろこ)ぶに足る也。

彼れは凌霄の姿を易(か)へて、徒(いたづら)に人の耳目の玩(もて

あそ)ぶところと為す者にして、六翮は摧(くだ)かるるを恐れ、雙心伏

怨す。嘖(ああ)、物には本性有り。艾を養ひ毅を重んじ、以て徒(いたづ)

らに參(やしな)ひ虚しく繫(つな)ぐ可けん乎哉。在林の鶴は、宜しく

何(いづく)に處(お)るべき乎。

程玉潤、吳興の人、鳥の画を得意とする。この画幅は、大竹の下に二羽の鶴が、一羽は肩を聳やかし、もう一羽は羽を梳かしている様子を描いている。白いツルが若竹の木陰を手に入れ、のんびりゆったりとして、鳥籠に押し込められる憂いが無いことは、本当に喜ばしいことである。

(しかし)二羽の鶴は、空高く飛ぶ姿を変化させて、人の鑑賞用にしたものであり、両翼を折られはしまいかと恐れ、二羽の心には恨みが潜伏している。ああ、物には本来の性質が存在する。玄宗皇帝は老人を慈しみ養い、農業を重視する優れた皇帝であったが、献上された二羽の白鷹を無駄に養い、空しく繫ぎ止めるべきだったのだろうか。林にいる鶴はどこに居るべきなのか。

注

程玉潤 詳細不明。

雪羽 白色の羽。『墮書』盧叟道傳：「振雪羽而臨風、掩霜毛而候旭。」

霜衣 白色の羽。北周 庾信「鶴贊」：「籠摧月羽、弋碎霜衣。」

蒼負 初生の竹。若竹。『易経』説卦：「為蒼負竹。」孔穎達の疏に：「竹初

生之時、色蒼負、取其春生之美也。」

優遊 ゆつたりしている。『詩経』大雅卷阿：「伴奭爾游矣、優游爾休矣。」

閒適 (心境が)のびやかである。唐 白居易「與元九書」：「至於諷詠者、

意激而言質、閒適者、思澹而詞迂、以質合迂、宜人而不愛也。」

樊籠 鳥獸の籠。晉 陶潛「歸園田居」詩之二：「久在樊籠里、復得返自然。」

凌霄 雲をしのいで天に昇る。晋 陸機「遂志賦」…「陳頌委於楚魏 亦凌霄以自濯。」

徒為人耳目玩者 典故は、宋・方回「過芙蓉嶺對鏡嶺羊門嶺新嶺塔嶺賦短歌五首」…「芙蓉非花鏡非鏡 無可充君耳目玩。」

六翮 一画翼。『戰國策』楚策四…「奮其六翮而凌清風 飄搖乎高翔。」

伏怨 潜んでゐる怨恨。『韓非子』用人…「内無伏怨之亂 外無馬服之患。」

本性 本来の性質。『荀子』性惡…「然則禮義積偽者 豈人之本性也哉。」

養文重穀 養文は、老人に孝養を尽くすこと。この語句の典故は、唐 蘇頌「雙白鷹贊」序の「寶賢重穀 尊儒養文。（賢を寶とし穀を重んじ、儒を尊び文を養ふ。）」による。これは、開元三年乙卯（七一五）に玄宗皇帝に対して東夷の君長から献上された白鷹二羽を詠んだもの。

33 跋夏珪雪景山水

老幹不事纖細小巧、骨格堅凝韶秀、有大家氣。即此一畫、雪色冪晦、從來陰晴不可知、有天道寓于中、謂畫不足興觀歎。

珪、錢塘人、寧宗時擅名、師范寬、李唐。罕有其儔。世之稱穉為珪者、

非其真也。

夏珪の雪景山水に跋す

老幹は纖細小巧に事（つか）へず、骨格は堅凝韶秀にして、大家の氣有り。此の一畫に即（つ）くに、雪色冪晦にして、從來陰晴は知る可からざるも、天道の中に寓する有れば、畫は興觀に足らずと謂ふ歟。

珪は、錢塘の人、寧宗時に名を擅（ほしいまま）にし、范寬、李唐に師す。其の儔（なら）ぶるもの有ること罕（まれ）なり。世の穉穉を珪と為す者は其の真に非ざる也。

老木の幹は纖細で巧緻な描写をしていないが、その骨組みは堅固にして秀麗であり、大家の氣風がある。この夏珪「雪景山水」について見るならば、雪が降って霞んで暗く、これまで晴天の風景なのか曇天の風景なのか分からなかったが、画中に天理が宿っており、画は『詩経』の詩のような、奮い立たせてくれたり、観察眼を鍛えてくれるという機能を充分には有していないと言えようか。

夏珪、錢塘の人、寧宗期にその名を轟かせ、范寬、李唐を師とした。夏珪に比肩するような画家は殆どいない。世間で荒い米粒でのような描き方を夏珪の作品とするのは、夏珪の真作ではない

注

跋夏珪畫山水 夏珪、南宋の画家。字は禹玉。錢塘の人。寧宗朝に画院

待詔となる。李唐の作品の影響下に、水墨の山水画を得意とした。同時代の馬遠とともに南宋院体画を完成させた。『王鐸年譜長編』によれば、本跋文は、順治三年（一六四六）三月、弟の鏞のために夏珪山水画を鑑定した時のものであるという。台北故宫博物院蔵「夏珪山水軸」に王鐸の跋文が記されているが、『擬山園選集』（文集）卷三十八記載の跋とは異なる部分がある。

小巧 精細巧妙。宋・周密『武林舊事』歲除：「銷金鬪葉、諸色戲弄之物、無不具備、皆極小巧。」

堅凝 揺るがない。頑丈である。明 方孝孺『茹荼齋記』：「先受天下之大患、涉天下之至苦、故其志堅凝而不懼、氣充盛而不衰。」

韶秀 麗しい。『新唐書』光王琚傳：「夏悼王一、生韶秀、以母寵、故鍾愛、命之曰一。」

雪色 雪の色。南朝陳徐陵「春情」詩：「風光今日動、雪色故年殘。」

蒙晦 茫漠として暗い。宋蘇軾「答程天侔書」之二：「新居在軍城南、極湫隘、粗有竹樹、煙雨濛濛、真鴛鴦獺洞也。」

陰晴 日向と日陰。唐王維「終南山」詩：「分野中峰變、陰晴衆壑殊。」

天道 天然自然の原理。『易經』謙：「謙亨、天道下濟而光明。」

興觀 『論語』陽貨に「子曰、小子、何莫學夫詩。詩、可以興、可以觀、可以群、可以怨。邇之事父、遠之事君。多識於鳥獸草木之名。」とある。

つまり、本跋文における興觀は、奮い立たせてくれたり、観察眼を鍛えてくれる、という意味。

擅名 名望を獲得する。『韓非子』外儲說右下：「二曰、入齊、則獨聞淖齒而不聞齊王、入趙、則獨聞李兌而不聞趙王。故曰、人主者不操術、則威勢

輕而臣擅名。」

范寬 北宋の山水画家。本名は中正、字は中立。華原の人。代表作は、「溪山行旅図」（台北故宫博物院蔵）。

李唐 北宋末・南宋初の画家。字は晞古。河陽三城の人。徽宗朝の画院に入ったが、靖康の変の後に、八十歳で臨安に至り、成忠郎、画院待詔となる。作品に「万壑松風図」（台北故宫博物院蔵）、「晋文公復国図卷」（メトロポリタン美術館蔵）などがある。

糝 粗い米粒。

参照：台湾故宫博物院蔵「宋夏珪山水軸」跋

老幹不事纖細小巧、骨格堅凝韶秀、有大家氣。即此一畫、雪色蒙晦、石寒鉄色。噫、陰晴不可知、有天道寓于中、謂畫者果無管歟。

夏珪、錢塘人、寧宗時擅名、師范寬、李唐。罕有其儔、凡以糝冒珪者、非其真也。丙戌三月。時居燕為二弟仲猷題、王鐸。

老幹は纖細小巧に事（つか）へず、骨格は堅凝韶秀にして、大家の氣有り。此の一畫に即（つ）きては、雪色蒙晦にして、石は寒く鉄色なり。噫（ああ）、陰晴は知る可からざるも、天道の中に寓する有れば、畫なる者は

果たして無善と謂ふ歟。

夏珪は、錢塘の人、寧宗時に名を擅（ほしいまま）にし、范寬、李唐に

師す。其の儷（なら）ぶるもの有ること罕（まれ）なり。凡そ輜輳を以て

珪を冒す者は其の真に非ざる也。丙戌三月。時に燕に居り二弟仲蘇の為に

題す、王鐸。

34 太清樓第九卷

此本、書姑蘇沈氏家物也、細視秋雨樓、隄隳非近日有、或閨閣婉媚之手歟。蓋宋忠陵善書、當時、嬪妃多從事翰墨、如吳夫人其選也、否則大令雄健奇特、何其不類歟。

予于海内觀、不下數韻、辨之頗論、不得混乎。真鼎雖細事、也亦宜致詳、況有關於人材治亂者歟。

太清樓第九卷

此の本、「姑蘇沈氏家物」と書する也、秋雨樓に細視するに、隄隳は近日の有に非ず、或いは閨閣婉媚の手なる歟。蓋し宋忠陵は書を善くし、當時、嬪妃（妃）は多く翰墨に従事す、吳夫人の如きは其の選也。否らずんば則ち大令は雄健奇特なるに、何ぞ其れ類せざる歟。

予は海内に于いて觀ること、數部を下らず、之を辨すること頗る諦（つ

まびらか）なれば、混するを得ざる乎。真鼎は細事と雖も、也（また）亦（また）宜しく致詳すべし、況んや人材治亂に關する者有るを歟。

この法帖には、「姑蘇沈氏家物」と書かれている。秋雨樓で仔細に鑑賞したところ、墨は近日のものではなく、もしかしたら女性の柔美な手による作品かもしれない。思うに、南宋の高宗は能書家であり、その当時、後宮の側室は多く書を嗜んでいた。憲聖慈烈皇后吳氏は、それによって選拔された人物である。そうでなければ、王猷之の書の力強く非凡さが、どうして似ないことがあるうか。

私が国内で鑑賞したものは、數部を下らない。これらを非常に詳しく弁別したので、混同しようか。本物であるかどうかはつまらないことであるが、詳細に觀察すべきである。まして人材や統治に關することならば尚更である。

注

太清樓帖 北宋・大觀年間（一一一〇—一一一七）に、徽宗が『淳化閣帖』に誤りが多く版木も傷んでいたことから、内府所藏の真跡に基づき編次させ、石刻して太清樓に刻石を置いたもの。宋拓が現在、北京故宮博物院に所藏されている。太清樓は、北宋皇宮崇政殿の西北、迎陽門内の後苑にあつた樓閣。第九卷は王猷之の書。

太清樓第九卷 朱文鈞『歐齋石墨題跋』に記載される「頃又見一本、行款高低與大觀同、唯帖首僅題法帖第九、下題晉王猷之、又與大觀不同、紙墨刻本均極古厚、又在此刻之上。大觀第九卷向未之見、不知究竟有否也。所見之本僅六版、以索值昂還之、然仍往來於心中也。翼廠又記、十一月十七日晴暖晨起書此。」

姑蘇沈氏家物 詳細不明。

秋雨樓 詳細不明。

隄 墨の古称。漢代、隄（陝西千陽）で作られた墨を貴重としたことから。宋・沈邁「七言和吳衝卿省捨觀蘇才翁題壁」：「空堂老壁隄塵昏、蘇子之蹟世所珍。」

閨閣 閨房。婦人の寢室。『史記』汲鄭列傳：「黯多病、臥閨閣内不出。」

婉媚 柔美。晉干寶『搜神記』卷四：「婦年可十八九、姿容婉媚。」

宋忠陵 南宋の高宗趙構のこと。北宋の皇帝徽宗の九男。能書家としても知られる。

吳夫人 南宋の高宗二番目の皇后、憲聖慈烈皇后のことか。『宋史』卷二百四十三列傳第二：「殊妍麗可愛、後頗知書、從幸四明、益博習書史、又善翰墨。」

大令 王獻之。東晋の書家。王羲之の第七子。琅邪臨沂の人。字は子敬。秘書郎、建威將軍、吳興太守を経て中書令に至ったため、王大令とも称される。

雄健 力強く勢いが良い。『宋書』氏胡傳：「蒙遜高祖暉仲歸、曾祖遮、皆雄健有勇名。」

奇特 特別。『百喻經』五百歡喜丸喻：「今復若能殺彼師子、為國除害、真為奇特。」

諦 詳らかにする。『説文』：「審也。」

真鼎 本物。清・沈初『西清筆記』卷二：「顏魯公自書呈身有兩本、今並刊於三希堂帖中、究未知孰為真鼎。」

致詳 詳しく観察する。宋洪邁『夷堅甲志』卷一九沈持要登科：「請君留此自照、三年一來、不可不致詳也。」

細事 小事。つまらぬ事。『詩経』唐風採芣「採芣採芣、首陽之顛」毛傳に「採芣、細事也、首陽、幽僻也。細事、喻小行也、幽僻、喻無徵也。」とある。

35 北海孫奉常藏歐陽修蘇東坡墨蹟 「王鐸書論評注（二）」第三章四

36 五絃少司空褚臨蘭亭墨蹟 「王鐸書論評注（二）」第三章二

37 跋觀濤圖

盛子昭觀濤圖、予得之曲周少司空劉半舫之僕、劉以追修河工、盡賣其園樹書畫、尚未足也。

畫濶六尺、豎九尺、側有吳匏庵題字。畫蕭瑟雄猛、一筆潑演而成者、傍寺、村、埕、利、林木、崖、坡、觀者鱗集如闐焉。而紅日下照、蒼茫萬丈、雪山雲霧之中、軋盤湧裔、混混屯屯捲天海而來、中有萬億龍蛟鼉龜、諸水族角伎獻怪、挾海水相噴薄、震蕩乾坤、無有端倪、人物為之晦冥、咸奔命于子昭筆底。噫、亦神奇矣哉。

秋窗南都無事、梧葉飄搖、一展觀之崩波瀾濤、魂撼心悸、天地之奇、造物固不能獨專、而人力滄壘能移天海如此、人固不當作畫觀也。然空王夜無人、或亦劉司空怒之、所望懽沸激耶。

觀濤圖に跋す

盛子昭觀濤圖、予之を曲周の少司空劉半舫の僕に得、劉は河工を追修するを以て、盡く其の園樹書畫を賣るも、尚ほ未だ足らざる也。

畫は濶(ひろ)き六尺、豎九尺、側に吳匏庵の題字有り。畫は蕭瑟雄猛、一筆にして潑演して成る者、傍の寺、村、塔(塔)刹、林木、崖陁に、觀る者鱗集すること闡の如し焉。而して紅日は白氣を下照し、蒼茫萬丈にして、雪山雲霧の中に軋盤湧裔、混混庵庵として天海を卷きて來り、中に萬億の龍蛟鼉鼉、諸水族の角伎有りて獻怪し、海水を挟みて相噴薄すれば、乾坤を震蕩し、端倪有る無く、人物は之れが為に晦冥、咸(みな)子昭の筆底に奔命す。噫、亦た神奇なるかな矣哉。

秋窓に南都無事にして、梧葉飄搖するに、一たび展じて之を觀れば、崩波瀾瀾に、魂撼心悸す、天地の奇は、造物固より獨專すること能はずして、而して人力の潑墨能く天海を移すこと此くの如し、人は固より當に畫を作して觀するべからざる也。然るに空夜無人にして、或いは亦た劉司空之に怒し、嗟憤沸激する所ならん耶。

盛懋「觀濤図」、私はこの画を工部尚書の劉榮嗣の下僕から入手した。劉榮嗣は黄河の治水工事を再び着工すべく、自身の庭園や所蔵の畫画を全て売却したが、それでもまだ資金が不足した。

盛懋「觀濤図」の幅は六尺、縦は九尺、端に吳寛の題字がある。繪画は秋の寂寥とした風景の中勇猛な海潮を、一筆で墨をぶちまけて描き完成させた作品であり、傍の寺院、村落、仏塔の相輪、樹林、岸辺の土手に、見物する者が群がり集まる様は市場の門のようである。陽光が白濁した波しぶきに射し込み、果てしなく広がる波は万丈にも達し、雪山にかかる雲霧のような海嘯の中で波は大きく湧き立ち、濤声が轟き、空も海も巻き込み

ながら押し寄せてくる。その中には彫大な数の龍や蛟、巨鱗があり、多くの水中生物が角を有して奇怪な姿を呈している。海水を巻き上げ吹き上げて迫り、天地を揺れ動かし、始まりも終わりも不明で、画中の人や物はそのため暗闇の中に置かれ、全ては盛懋の筆下に逃げ惑うのである。ああ、またなんと不思議な作品なのか。

秋の窓辺で、南京は事件も無く梧葉がひらひらと翻り落ちる中、盛懋「觀濤図」を広げて鑑賞すれば、画中の崩れ落ちる波濤、大海の生命を育む様に、魂はおののき心は揺れ動く。天地の奇は、本来、創造主だけが作り上げるものではなく、画家の潑墨の力量によってこのように天も海も紙上に移させられるのであるが、元来、人はこのような景色を作画し鑑賞すべきではないのだ。ところが、人氣が無く孤独な夜に、もしかしたら劉榮嗣どのは、この画を見て自然の猛威に怒りを感じ、心を揺り動かされ湧き立たせられたのか。

注

跋觀濤圖 『王鐸年譜長編』によれば、本跋文は崇禎九年(一六三六)の秋に書かれたものであるという。

觀濤圖 錢塘江の海潮(秋の大潮の時期に、海から川へ潮の流れが逆流する現象)を描いた繪画。

盛子昭 盛懋、字は子昭。嘉興の人。元の職業画家。父の盛洪の画風を受け継ぎ、趙孟頫の門人でもあった陳琳に学ぶ。その画は、山水、人物、花鳥画をよくした。彼の画は、明代の院派、浙派、呉派の画家に大きな影響を与えた。

少司空 工部侍郎の別称。

劉榮嗣 明末の大臣。字は敬仲、号は簡齋、半舫。直隸曲周県の人。万曆

四十四年（一六一六）の進士。初め戸部主事を授かる。後に吏部驗封司主事に転任し、吏部考功司、文選司、稽勳司郎中などを歴任。また、累進して工部尚書となる。崇禎六年（一六三三）、總理河道、霍維華の議により、宿遷から徐州までの新河を別に開鑿するも失敗。崇禎八年（一六三五）、自己資本で五十余万を費やすも、治水工事が完成せず、南京刑科給事中曹景參に弾劾され獄中死した。

劉以追修河工 『崇禎實錄』卷八に、「崇禎八年）九月戊申朔、逮總理河道工部尚書劉榮嗣。初、榮嗣以黃水濟宿遷之運、既鑿、而黃河故道朝暮遷徙、不可以舟。於是南京刑科給事中曹景參劾之、被逮。中河工部郎中胡璉坐贓多論死、始首事侵費俱不由璉、人頗惜之。」とある。また、『明史』列傳三〇六卷・霍維華傳に、「七年、駱馬湖淤、維華言於治河尚書劉榮嗣、請自宿遷抵徐州、穿渠三百餘里、引黃河水通漕、冀救功復職。榮嗣然其計、費金錢五十餘萬、工不成、下獄論死、維華意乃沮。」とある。

園榭 ここでは、劉榮嗣の邸宅のことを言うのであろう。

吳匏庵 吳寛、字は原博、号は匏庵、玉亭主。匏庵先生、匏翁とも称される。直隸長洲県の人。成化八年（一四七二）、状元にて進士に及第する。弘治十六年（一五〇三）、礼部尚書となる。

蕭瑟 物寂しい。『楚辭』九辯…「悲哉、秋之為氣也。蕭瑟兮、草木搖落而變衰。」

雄猛 勇猛。『周書』王勇傳…「勇性雄猛、為當時驍將。」

塔刹 塔刹。仏塔の最上部に位置する。相輪。

林木 樹林。『荀子』勸學…「林木茂而斧斤至焉、樹成陰而眾鳥息焉。」

鱗集 群がり集まる。『漢書』劉向傳…「子弟鱗集於朝、羽翼陰附者衆。」

闐 市場の門。

紅日 太陽。唐王建「宮詞」之一…「蓬萊正殿壓金甃、紅日初生碧海濤。」

白氣 白雲。『漢書』谷永傳…「白氣起東方、賤人將興之表也。」

蒼茫 広々として果てしない。晋潘岳「哀永逝文」…「視天日兮蒼茫、面邑里兮蕭散。」

軋盤湧裔 波のわき立つさま。『文選』枚乘「七發」…「旬隱凶礚、軋盤湧裔、原不可當。」劉良の注に「軋盤湧裔、皆沸騰也。」とある。

混混屯屯 波の音。『文選』枚乘「七發」…「混混屯屯、聲如雷鼓。」李善の注に「混混屯屯、波浪之聲也。」とある。

龍蛟 蛟龍、すなわち蛟。北齊陸印「皇夏樂」詩…「風雲馳九域、龍蛟躍四溟。」

鼉鼉 中国の伝説上の怪物。巨鱉や猪婆龍のこと。晋王嘉「拾遺記」…「舜命禹疏川奠岳、濟巨海則鼉鼉而為梁。」

水族 水中にすむ生き物。南朝宋鮑照「還都至三山望石頭城」詩…「晨光被水族、曉氣歇林阿。」

噴薄 湧き上がり、激動する。唐沈佺期「過蜀龍門」詩…「流水無晝夜、噴薄龍門中。」

震蕩 揺れ動く。『左傳』襄公二十六年…「楚師輕窺、易震蕩也。」

乾坤 天地。唐杜甫「登岳陽樓」詩…「吳楚東南坼、乾坤日夜浮。」

端倪 事の始まり。『莊子』大宗師…「反覆終始、不知端倪。」

晦冥 日が沈む。『史記』高祖本紀…「是時雷電晦冥、太公往視、則見蛟龍於其上。」

奔命 命を守るために逃げる。『舊唐書』黃巢傳…「尚讓、林言率前鋒由蔡谷而入…僖宗夜自開遠門出、趨駱谷、諸王官屬相次奔命。」

筆底 筆遣い。唐劉禹錫「答樂天見憶」詩：「筆底心無毒、杯前膽不豚。」
神奇 大變奇妙なこと。『莊子』知北游：「是其所美者為神奇、其所惡者為
臭腐。臭腐後化為神奇、神奇後化為臭腐。」成玄英の疏に「故情之所美者、
則謂為神妙奇特。」とある。

無事 暇なこと。『孟子』滕文公下：「士無事而食、不可也。」

飄搖 ひらひらと翻る。明劉基「郁離子」九難：「於是乎翠蓋飄搖、文鶴
委蛇、嘉朋遠至。」

崩波 勢いよく沸き立つ波。『文選』鮑照「還都道中作」詩：「客行惜日月、
崩波不可留。」呂向の注に「崩波、猶奔波也。」李善の注に「言客行既惜日
月、兼崩波之上、不可少留。」とある。

造物 万物を生み出す神。『莊子』大宗師：「偉哉、夫造物者將以予為此拘
拘也。」

獨專 独占。漢班固「白虎通」封公侯：「名山大澤不以封者、與百姓共之、
不使一國獨專也。」

潑墨 山水画法の一つ。たつぷりと筆に墨をつけて、はね散らすようにし
て描く画法。『宣和畫譜』王洽：「王洽不知何許人、善能潑墨成畫、時人皆
號為王潑墨。」

蛭 蝮、蛇字省文。蛭、屈曲旋回するさま。南朝梁蕭統『文選』馬
融・長笛賦「滌汨澎湃、蛭蟻相糾。」

沸激 騒ぎ沸き立つ。唐李咸用「煌煌京洛行」：「歌鐘沸激香塵散、晨旗隱
隱羅軒冕。」

38 跋戲魚皇帖 「王鐸書論詠注（二）」第二章五

39 跋聖教序 「王鐸書論詠注（二）」第二章八

40 跋晉唐小楷書

晉小楷、法皆本篆隸、不作近儂薄態。此本載樂毅黃庭二篇、較停雲刻手
尤工、蓋宋人所榻云。夫樂毅功名事耳、今垂聲天壤、於涉履之艱險、備試
之矣。而黃庭則道藏退修事也、其言玄微、包天人性命為一裹、予因二帖憫
然、念之、若牧齋一代鴻學、豈能終韜其事功耶。事功後、能忘三神、自然
旋璣懸珠開七門耶。不然、何其津津嗜此也。

晉唐小楷書に跋す

晉の小楷、法は皆な篆隸に本つき、近ごろの儂薄の態を作（な）さず。

此の本は樂毅・黃庭の二篇を載せ、停雲の刻手に較（くら）べ尤も工（た

くみ)にして、蓋し宋人の榻する所と云ふ。夫れ樂毅の功名の事耳(や)、今聲を天壤に垂れ、涉履の艱險に於いて、備(つぶさ)に之を試めり矣。

而して黃庭は則ち道藏退修の事也、其の言は玄微にして、天人の性命を包みて一裹と為す、予は二帖に因りて憫然たり。之を念ふに、牧齋の若きは

一代の鴻學にして、豈に能く終に其の事功を韜(かく)さん耶。事功の後、能く三神自然にして旋璣懸珠の七門を開くを忘れん耶。然(しから)ずんば、何ぞ其れ津津として此を嗜(たしな)まん也(や)。

晋の小楷、書法は全て篆書・隸書を基としており、最近の軽薄なスタイルとはなっていない。この法帖には王羲之「樂毅論」「黃庭經」二篇を掲載しており、『停雲館帖』の刻法に比べて甚だ優れているので、思うに宋人の榻本であろう。そもそも、樂毅の功績と名声は、現在天下に知れ渡っており、乗り越えるべき困難や危機についてはことごとく試みている。「黃庭經」は、『道藏』の中で退修のことを記したものである。その言葉は奥深く微妙で、天と人、性(内在的道、心性)と命(外在的道、身体)を包括的に論じ、一書としている。私は「樂毅論」「黃庭經」に接することで憂いに沈んでしまう。思うに、錢謙益のような一代の博學は、彼の功績と名声を最終的に隠しおおせることがありえようか(誰も彼の功績と名声を知っている)。功績をあげ名声を得て後、存思の修行によって、三丹田に宿る神々が自然

な状態となり、体の中心である旋璣懸珠に気が流通し人体の七つの穴(目、耳、鼻、口)を開くことを忘れえようか。そうでなければ、どうして興味を持って「晋唐小楷書」を嗜めようか。

注

跋晉唐小楷書 『王鐸年譜長編』によれば、本跋文は順治二年(一六四五)十二月三十日、錢謙益所蔵の刻帖に書かれたものだという。

儂薄 巧妙狡猾で阿諛追従し、軽薄である。『苕溪漁隱叢話』羅隱に引く宋・蔡絛「西清詩話」…吳越紀事、越僧僂默、賦詩有奇句、嘗云、到江吳地盡、隔岸越山多。羅隱見曰、此我句、失之久矣。乃為吾師丐得。識者鄙其儂薄太甚。」

樂毅 東晉・王羲之の小楷作品「樂毅論」のこと。「樂毅論」は、三國時代・魏の夏侯玄の文章で、戦国時代の將軍樂毅について、その王道に沿った戦いを説く。

黃庭 東晉・王羲之の小楷作品「黃庭(外景)經」のこと。道教經典。黃庭(脾臓の象徴)を中心とする道教的身体構造論に基づき、五臓神をはじめとする人体に宿る八百万の神々の観想と呼吸法の実践とにより、不老長生を得て神仙とされることについて説いたもの。

停雲 『停雲館帖』のこと。明代、文徵明が文嘉と共に刻した叢帖。晋・唐の名帖、宋・元・明の法書を選んで刻し、二十三年を費やして嘉靖三十九年(一五六〇)に完成。名跡を得る毎に増刻したため、四卷本、十卷本、十二卷本の三種、重刻本などがある。収録作品の選択が優れ、真行草の各書体を備える。停雲は陶淵明の詩話に基づいた文徵明の畫齋の名。

刻手 刻法。明屠隆『考槃餘事』帖箋…「百一帖 宋王曼慶刻 筆意清適

雅有勝趣、但刻手不精。」

功名 功績と名声。『莊子』山木：「削跡損勢、不為功名。」

天壤 天地。『晉書』張華傳：「普天壤而遐觀、吾又安知大小之所如。」

涉履 踏みつけて通る。『後漢書』段熲傳：「涉履霜雪、兼行晨夜、身當矢石、感厲史士。」

艱險 困難や危機。『後漢書』虞詡傳：「先是連道艱險、舟車不通、驢馬負載、僦五致一。」

備試之矣 『春秋左氏伝』僖公二十八年「險阻艱難、備嘗之矣。」

道藏 仏教の經典『大藏經』にならって、道教經典を集成したもの。現存のものは、明代の五三〇五卷の「正統道藏」(一四四五年刊)と百八十卷の「万曆統道藏」(一六〇七年刊)を合わせたもの。洞玄(説理)・洞真(実相)・洞神(符呪)の三洞に分かれ、その下に太玄・太平・太清・正一の四部の分類がなされている。

退修 道教の語。職を退き隠棲して道教の修行に努める。

玄微 奥深く微妙なこと。晉袁宏『後漢紀』明帝紀下：「有經數千萬……世俗之人以為虚誕、然歸於玄微深遠、難得而測。」

惘然 憂え傷むさま。唐白居易「琵琶行」序：「使快彈數曲、曲罷惘然。」

鴻學 學問に深く通じていること。唐舒元興「問國學記」：「至於西、有高門、門中有廈屋、問之、曰此論堂也。予愧非鴻學、方論、不敢入。」

事功 功績。『三國志』魏志牽招傳：「漁陽傅容在雁門有名績、繼招後、在遼東又有事功。」

韜 隠す。藏する。『廣韻』：「藏也。」

三神 『黃庭内景經』隱影「三神之樂由隱居、條歛遊遨無遺愛。」梁丘子注「三神、三丹田之神也。」

璇璣懸珠 渾天儀の類。『黃庭外景經』闡微・璇璣章第十三「璇璣懸珠環無端、玉牝金鸞呈元堅、載天懸地周乾坤、象以四時赤如丹、前仰後卑各異關、送以還丹與玄泉、象龜引氣至靈根。」

七門 目・耳・鼻・口。『黃庭外景經』闡微・中有章第十四「中有真人巾金中、負甲持符開七門……」

41 **跋陸包山染水花卉卷**

予得此卷于白蓮潭僧舍、格用徐熙、而態度筆意與陳道復同一、致化工在腕、洛陽春色移姑蘇之西港矣。前代趙明誠獲徐熙畫、無二十萬貫不能得、夫婦惋惜、竟日不憚。

余家河南、書畫經寇火、蕩為灰塵、其餘亦散落他人。今包山有熙之意、不較明誠為快耶。又無二十萬貫、以畫兩條易之、欣喜歡愛、視竟日不憚、又何但霄淵耶。然明誠有婦、予鼓盆已四年矣。予所有之花卉、明誠不及有、明誠惜畫之婦、予亦不能存。若是、予又於明誠霄淵、欣喜歡愛、能憚于懷歟。

陸包山の染水花卉卷に跋す

予は此の卷を白蓮涇僧舎に得、格は徐熙を用ゐ、而して態度筆意は陳道復と同一にして、化工を致すは腕に在りて、洛陽の春色を姑蘇の西港に移せり矣。前代の趙明誠は徐熙の畫を獲るに、二十萬の貲無く得ること能はず、夫婦惋惜し、竟日懽ばず。

余は河南に家し、畫畫は寇火を經、蕩して灰塵と為り、其餘も亦た他人に散落す。今包山には熙の意有りて、明誠に較べて快と為さざらん耶。

又た二十萬の費無く、畫兩條を以て之に易(か)へ、欣喜歡愛す、竟日不懽ばずに視(くら)べて、又た何ぞ但だに霄淵のみならん耶。然るに明誠には婦有り、予は鼓盆すること已に四年なり矣。予の有する所の花卉は、

明誠有するに及ばず、明誠畫を惜しむの婦は、予も亦た存すること能はず。

是(か)くの若く、予又た明誠に於いて霄淵なるも、欣喜歡愛は、能く懐ひに懽ばん歟。

私はこの陸治「染水花卉卷」を白蓮涇僧舎で入手した。風格は徐熙を用い、氣迫や筆意は陳淳と同一である。自然の美の再現は陸治の技量により、洛陽の春の景色は姑蘇の西港に移った。宋代の趙明誠は徐熙「牡丹図」を得ようとした際、二十萬の財が無く入手できず、妻の李清照と共に嘆き悲しみ、終日塞ぎ込んだ。

我が故郷は河南であったが、故郷の畫画は戦火に遭い、灰燼に帰してしまい、残余のものも他人の手にわたった。今、陸治「染水花卉卷」には徐熙の画意があり、趙明誠と比べて愉快な気持ちになれないであろうか。加えて、二十萬の財も無く、二卷の書作品と陸治「染水花卉卷」とを交換して歓喜愛好している。趙明誠・李清照夫婦が終日塞ぎ込んだことと比較して、天地の差以上のある。しかし、趙明誠には妻の李清照がいた。私は妻と死別して既に四年の歳月が流れている。私が所蔵する陸治「染水花卉卷」は、趙明誠は所有できなかった。徐熙「牡丹図」を入手できないことを憂いた趙明誠の妻は、私にはいない。このように、私と趙明誠の間には大きな違いがあり、陸治「染水花卉卷」を入手した喜びと愛好する気持ちは、果たして心から喜べようか。

注

跋陸包山染水花卉卷 陸治、明の文人画家。吳興の人。字は叔平、号は包山子。文徵明、祝允明の門に遊んで詩文をよくし、山水画は文徵明に学んだ。代表作に『潯陽秋色図』、『石湖図卷』がある。『王鐸年譜長編』によれば、陸包山「染水花卉卷」は、順治三年（一六四六）、戦禍より避難した際、蘇州の白蓮涇の僧舎から得たものであるという。「染水」は、輪郭線を描かない没骨画法を指すのであろう。没骨画法は、五代・徐熙に始まるとされ

る。

僧舍 寺院。宋真山民「曉行山間」詩：「僧捨在何許，隔林鐘磬清。」

徐熙 五代南唐の画家。金陵の人。また一説に鍾陵の人。花鳥画に優れ、

宋の太宗に認められ、彼の画風は徐氏体と呼ばれた。

陳道復 陳淳、明代の画家。江蘇長洲の人。字は道復、復甫、号は白陽山人。文徵明の弟子の中で特に名高く、水墨花卉画に優れた。

化工 自然に形成された美しさ。明・李贄「雜說」：「拜月西廂、化工也、

琵琶、畫工也。夫所謂畫工者、以其能奪天地之化工、而其孰知天地之無工

乎。」

前代趙明誠獲徐熙畫、無二十萬貫不能得、夫婦惋惜、竟日不懌 李清照『金石録』後序に、「嘗記崇寧間、有人持徐熙牡丹圖、求錢二十萬。當時雖貴家子弟、求十萬錢豈易得耶、留信宿、計無所出而還之。夫婦相向惋惜者數日」とある。

趙明誠 趙明誠、字は德甫、また德父。密州諸城の人。北宋徽宗期の宰相

趙挺之の第三子。十八歳の時に李清照と結婚。若くして太学生となり、蔭

官によって官を得る。崇寧四年（一一〇五）に鴻臚少卿となる。大觀二年

（一一一〇八）、妻と一緒に青州の故居に帰り、金石遺文の蒐集に取り組む。

著書に『金石録』がある。

賞財 『廣雅』：「賞、財也。」

夫婦 趙明誠、李清照夫妻のこと。李清照、宋代の女流詞人。号は易安居

士。済南の人。趣味と学問の優雅な生活を夫の趙明誠ともにしたが、北宋

末の金軍の侵略で江南に逃れた際、夫と死別。晩年は浙江に流寓して、後

に再婚、離婚を経験する。詞集『漱玉詞』一卷がある。

惋惜 哀惜。南宋劉義慶『世説新語』汰苴：「愷既惋惜、又以為疾已之寶、

聲色甚厲。」

竟日 終日。『列子』說符：「不笑者竟日。」

散落 散失。『漢書』五行志下之上：「伯道將廢、諸侯散落。」

欣喜歡愛 喜び好む。『禮記』樂記：「欣喜歡愛、樂之官也。」

霄淵 天地。相違のはなはだしいものの喩え。明王廷相『雅述』下篇：「夫

將士且不與我矣、尚安得禦敵。忠智俱失、較諸武穆、順事安命以聽於君、

相去霄淵矣。」

鼓盆 妻と死別すること。『莊子』至樂：「莊子妻死、惠子弔之、莊子則方

箕踞鼓盆而歌。」成玄英の疏に「盆、瓦缶也。莊子知生死之不二、達哀樂

之為一、是以妻亡不哭、鼓盆而歌。」とある。『王鐸年譜長編』によれば、

王鐸は妻の馬夫人を崇禎十五年（一六四二）に亡くしたという。

能憚於懷歎 憚懷は、心の喜び。南朝・梁・劉勰『文心雕龍』書記：「詳總

書體、本在盡言、言以散鬱陶、託風采、故宜條暢以任氣、優柔以憚懷。」

の持ち去るところと為る。今沈子は復た此の幅を以て題を求むるに、紙上の江山は故(もと)の如くして、而も目前の意象は各おの殊(こと)なる。憶ふに前日の西湖は、楊柳葭菼、兩岸の芙蓉、遊舫の歌簫、老僧は墨を磨し、權聲は夕陽の間に在り、恍然として此の圖中の意象也。

錢塘の馬十英、陳盟、阮大鍼、楊文聰が輩、群犬牙して而して咆哮す。何れの時にか復た西湖に至りて、衣を解きて盤礴として、新秀の江山を看、仍ほ風雨歸舟圖を作るや否耶。

私は杭州の西湖に滞在していた。風雨の後、私が親戚の王維を模倣して作画したのだが、その画を沈子に持ち去られてしまった。今、沈子がさらにこの画の題跋を私に求めてきた。紙上の江山は昔のままであるが、目の前のイメージはそれぞれ異なる。前日の西湖を思い出すに、柳や葦や荻、兩岸の芙蓉、遊覧船で歌と簫に興じ、老僧が墨を磨り、夕日が照らす中、渡し場に戻る船の櫂の音がきこえ、まるでこの画中のイメージのようだ。南京が陥落し錢塘に逃れた福王政権の馬十英、陳盟、阮大鍼、楊文聰らは、群犬のように牙をむき咆哮している。一体いつ再び西湖に赴き、衣を解いてくつろぎ、雨上がりの山河を見ながら、引き続き風雨歸舟圖を描けるようになるであろうか。

注

自跋予西湖舟中小幅山水圖 『王鐸年譜長編』によれば、本跋文は、崇禎十七年(一六四四)四月末から五月初めに書かれたものであり、この時期に王鐸は杭州にいたという。

意象 有様。『漢書』李廣傳…「廣不謝大將軍而起行、意氣愾愾而就部。」

葭菼 葦と荻。『詩』衛風碩人…「葭菼揭揭。」毛傳に「葭、蘆、荻、亂也。」とある。

遊舫 遊船。宋蘇軾「有以官法酒見餉者因用前韻求述古為移廚飲湖上」…「遊舫已粧吳榜穩、舞衫初試越羅新。」

恍然 あたかもこのようだ。明方孝孺「晝後」…「展卷而臥閱之、恍然如乘扁舟出入洞庭彭蠡之上。」

馬十英 明末の奸臣。貴陽の人。字は瑤章。万曆四十七年(一六一九)の進士。宣府巡撫の時代、公財を賄賂に使用して罪を得たが、宦官魏忠賢の一派である阮大鍼に助けられ、鳳陽総督として復活。崇禎十七年(一六四四)、兵を擁して福王を南京で即位させ、東閣大学士兼兵部尚書となる。馬十英は王の暗患に乗じて実権を握り、阮大鍼と結託して専権を振る。清軍が南京を落とした際、杭州に逃れ、魯王に投じようとしたが、捕獲、処刑された。

陳盟 字無盟、号は雪灘、四川富順の人。天啓二年(一六二二)の進士。

天啓四年(一六二四)に翰林院檢討を授かる。天啓七年(一六二七)に浙江主考、崇禎元年(一六二八)に国子監司業となる。崇禎十七年(一六四四)南京政権の際、經筵講讀、吏部左侍郎となる。

阮大鍼 明末清初の戯曲家。明末の大臣。字は集之、号は圓海、石巢、百子山樵。懷寧の人。万曆四十四年(一六一六)の進士。天啓年間に魏忠賢の下で東林党を弾圧。後に失脚したが、弘光帝のもとで復活し、再び東林党や復社を弾圧した。明滅亡後、馬十英と福王を擁立し、福王政権下で兵部尚書、右副都御史となる。東林党や復社の人に対し冤罪を着せ、報復。南京政権滅亡後は清朝に降った。

楊文聰 楊文聰、字は龍友、貴州の人。万曆四十七年(一六一九)の举人。

馬十英の妹と結婚。六度も会試を受験したが、及第せず。福王政権の弘光元年（一六四五）、右僉都御史となる。当時、鄭鴻逵が長江の対岸で攪乱を行うも、清朝が撤退を偽装し、大きなイカダに灯りを置いた。楊文聰は誤って自軍が勝利したと思ひ込み、大急ぎで妻の兄の馬十英に報告してしまふ。

咆哮 たけり吠える。晉葛洪『抱樸子』清鑒…「咆哮者不必勇、淳淡者不必怯。」

解衣 自分の著物を脱いで著せ、自分の食べ物をすすめて食べさせる。『陳書』華皎傳…「時兵荒之後、百姓飢饉、皎解衣推食、多少必均、因稍擢為鹽陽、山陽二縣令。」

盤礴 両足を前に投げ出して座る。『莊子』田子方…「宋元君將畫圖…有一中後至者、儻儻然不趨、受揖不立、因之捨。公使人視之、則解衣盤礴、嬴。君曰…可矣、是真畫者也。」成玄英の疏に「解衣箕坐、裸露赤身、曾無懼憚。」

43 題韓藩畫冊

是畫松江一派、似宋元詩文、單薄嫩弱狹小、不能博大深厚、即稍有小致

如盆景二寸竹、七寸石、一寸魚耳、視四海五嶽魄力何如。近惟張復不然

知之者鮮、可見人情苦難學易、舍古學今、往往墮尖纖一路、難以戶說。豈

獨一畫然也。

韓藩の畫冊に題す

是の畫は松江の一派にして、宋元の詩文に似て、單薄嫩弱狹小にして、

博大深厚なること能はざれば、即へ稍（やや）小致有れども、盆景の二寸

竹、七寸石、一寸魚の如き耳。四海五嶽の魄力に視（くら）べて何如。近

ごろ惟だ張復のみ然らざるも、之を知る者鮮（すくな）し。人情として難

に苦しみ易を學び、古を捨て今を學ばば、往往にして尖纖の一路に墮し、

以て戸説し難きを見る可し。豈に獨り一畫のみ然らん也（や）。

この画は松江派の絵画であり、宋元の詩文に似て、単純で味わい薄く力は弱々しくせせこましいもので、学識厚く志が深く雄大ではありえず、仮に幾らかの小さな趣があつたとしても、盆栽における二寸ほどの竹、七寸ほどの石、一寸ほどの魚のようなものに過ぎない。四海（東海、南海、西海、北海）、五岳（泰山、衡山、華山、恆山、嵩山）の迫力と比べてどうであろうか。近頃、張復だけが松江派の画家とは違ふが、それを知っている人は少ない。このことから人情として困難に苦しむと容易なことを学ぶようになり、古の知見を捨てて、今の知見を学ぶと、とかく狭い解釈に陥つ

てしまい、広く人々に説明することが困難になることがわかる。これは絵画に限ったことであろうか。

注

題韓藩畫冊 韓藩については不明。

松江一派 松江派。明末山水画の流派の一つ。明代吳派の一分派。松江派という名称は、董其昌の出身地に基ついたもの。顧正誼の華亭派を先達とし、後に趙左の蘇松派、松江派が並び、一世代若い沈士充の雲間派があり、数人の流派の始祖を別にして、様式は混合する。

單薄 力が僅かなもの。唐・李翱「祭從祖弟秘書少監文」：「有酒在醜、有肉在盤、魂兮其來、歆此單薄。」

狹小 狹隘。『淮南子』俶真訓：「牛蹠之涔、無尺之鯉、塊阜之山、無丈之材……皆其營宇狹小、而不能容巨大也。」

博大 广大。『管子』權修：「萬乘之國、兵不可以無主、土地博大、野不可以無吏。」

深厚 学業、技術の基礎力の豊さ。清・錢謙益『列傳詩集小傳』王慎中：「道思詩體初宗艷麗、工力深厚、歸田以後、攬雜講學、信筆自放、頗為詞林口實。」

盆景 盆景は中国を起源とする。盆上に土や砂、石、苔や草木などを配置し、自然の景色を造形して鑑賞する芸術。

四海 中国を取り巻く四方の海。東海、南海、西海、北海。『書經』益稷：「予決九川、距四海。」孔傳に「距、至也。決九州名川通之至海。」とある。

五嶽 泰山、衡山、華山、恆山、嵩山のこと。『周禮』春官大宗伯：「以血祭祭社稷、五祀、五嶽。」鄭玄の注に「五嶽、東曰岱宗、南曰衡山、西曰

華山、北曰恆山、中曰嵩高山。」とある。

魄力 迫力。力強さ。氣迫。

張復 明末の山水画家。字は元春、號は蒼石。江蘇太倉の人（一説に中條山の人）。内容と性質の異なる画家を受容することに長け、荆浩、關仝、馬遠、夏珪、黃公望、沈周の情趣を得て、吳門画派の最も才能ある画家の一人となった。

苦難 苦痛や災難。南朝宋・顏延之「秋胡」詩：「有懷誰能已、聊用申苦難。」

尖纖 狭い。唐・白居易「裴常侍以題薔薇架十八韻見示」詩：「散亂菱紅片、尖纖嫩紫芒。」

一路 道。漢・王充「論衡」是應：「太平之時、豈更爲男女各作道哉。不更作道、一路而行、安得異乎。」

戶說 一軒一軒に告げ諭して、説明する。『管子』水地：「是以聖人之治於世也、不人告也、不戶說也。」